
東方雷鳥録

たぬく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方雷鳥録

【Nコード】

N1498W

【作者名】

たぬく

【あらすじ】

いつ死んだか、いつ目覚めたか全然分からない。気づけば鳥だった・・・みたいな話。

PV30000

ユニーク5000突破しました！

これからも拙作をよろしく願います。

プロローグ（前書き）

初めまして。たぬくです。東方雷鳥録をお読みいただきありがとうございます。
ございます。

それではどうぞ（＾Ｏ＾）／

プロローグ

ライチヨウ、というと思い浮かべるものはなんだろうか。

もちろん、日本の山岳地帯に生息し、冬になると白い冬羽に生え変わるキジの一種を思い浮かべると思う。

では、英語表記した場合どうだろう。

THUNDER BIRD

直訳すると雷の鳥でサンダーバード。

これを聞いて気づいた方もいるだろうが補足をする、サンダーバードとは北米先住民の多くの部族の伝承に登場する、巨大な鳥である。

特徴としては、鋭い爪を持ち、大きな翼を羽ばたかせる事で雷鳴を生み、目、または翼や嘴から、稲妻を発する、といった物があげられる。

容姿は、赤い羽毛をまとった鷲に似ているとか、人間の顔を持つ、などの諸説がある。

これはそのサンダーバードとライチヨウの境界が曖昧になった、そんな妖怪のお話である。

いつかあの空で自分も羽ばたけるのかな？

ある巢の中で、生まれながら人間の記憶を持った一羽の鳥がそんな事を呟いた。

木々の隙間から僅かに見える青空。

ほぼ同じ時期に生まれた雛達の鳴き声が耳の中で反響する。

まだ発達していない羽根を懸命に羽ばたかせた。

いつかじゃない。
いま飛びたいんだ。

知性があったが故の好奇心

前は飛べなかった……
だから……

無理に動かした翼の羽根は散り、ふとした拍子にその鳥は巣から落ちてしまった。

そんな時、偶然人が通り掛かった。
そして巣から落ち、鳴き声をあげていたその雛を見つけ、好意からかそのまま巣に戻した。

雛は懸命に語りかけた。
『ありがとう』って。

どうしても感謝の意を伝えなかった。

彼女は笑った。

その雛の意思が通じたのか、ただ単に甲高い声で鳴く雛を可愛らしく思ったのか。

運が……

悪かったんだと思う。

その次の日以降、親鳥が巣に戻って来ることは無かった。
人の匂いを嫌ったんだ。

唯一の食事の方法。

それが失われた雛鳥達は餓えに苦しみ、一羽、また一羽……と巣に亡きがらを曝すこととなった。

最後に残ったのが、巣から落ちてしまった知性を持った雛であった。

なんでだろう？

雛は呟いた。

なんで……

時は過ぎ、その雛もまたその巣の中で力尽きた。

しかし、その雛の亡きがらだけは腐る事が無く、
いつしかそれは――――

――妖怪となった。

ゴンッ

「つつう……」

ある木の枝が大きく揺れた。そして聞こえたのはなにかがぶつかつたような鈍い音。

「うえ……。土飲んじやったよ……」

声の主は何度か咳を鳴らした。

眠い眼を擦りながら、そんな朝を毎日のように声の主は送っている。

「お、心配してくれるのか？」

木から落下して、地面に座り込んでいる声の主に近寄る影があった。およそ数10センチ程の真ん丸とした鳥の影である。

「……え？　新しい餌場を探してきてくれ？」

……良いもんね。別にいつもの事だし。うん」

内心で愚痴を零しつつ、声の主は地面を蹴り、大空へ飛び上がった。

青い空。かつては見上げるだけであつたもの。飛べば自分はそこに居られる。

それは間違えだった。

飛んでも飛んでも上には青い空が広がる。

それこそ、雲の上を越してもまだ、青い空は頭上にありつつける。

朝の陽射しが照らす中、声の主——ライチヨウの妖怪の少年——は空で黒き翼を羽ばたかせた。

プロローグ（後書き）

はい。プロローグです。なんか見たことある話、と思った方も多いと思います。妖怪になる、って過程を考えたらこれしか浮かばなくて・・・すみません。

次回もお読みいただけると嬉しいです。

天狗達の社会（前書き）

第1話です。

では、どうぞ（＾Ｏ＾）／

天狗達の社会

「あー、怠い。どのくらい怠いかって言うのと全く聞こえない大天狗共の説教を聞くくらい」

「何言ってるんですか。確かにそう思いますけど、早く見回り行かないと天魔様に怒られますよ」

「あー、うん。分かってる」

俺の名前は溜衣。

ライチヨウ（※）の妖怪である。だが、どうしたことか。今は天狗の社会に帰属している。あー、意味不明。

実際俺も把握しきれていないのだ。

どうしてこうなったかと言うと……

ある朝、起床する。

仲の良いライチヨウ達に会いに、やや傾いたハイマツを目印に急降下。

そうしたらどういう事だろうか。

巢はもぬけの空。

羽が散り、血が地面にこびりついてる。間違いなく狐等の天敵に襲われたんだろう。

さて、どうするか。

ん？あ、天狗だ。

なに？鴉天狗に似てるから仲間になれ、だって？　まあ、何もすること無いし良っかあ。

つてな感じである。

意味わからないですね。ありがとうございました。

「進入者が入ったらしいです！　さ、行きましょう」

「ねえ、射命文丸」

「射命丸文です」

「あ、うん。そうだった。それでさ、頭痛いから俺今日は休むよ」

射命丸文。赤い天狗下駄を履きフリルのついた黒スカートと白い半袖シャツに身を包んだ鴉天狗の少女。

時代錯誤も甚だしい服装で、たまにその事について彼女と議論したりする。主に入手法について。他の女性天狗もこの服装なのかと言えど否。であり、特別な入手法があるのでは？と思ったからである。

彼女曰く、「家にあっただすよ」

曰く、「母の形見なんです」

後者を聞き、慌てて話を変えたのだが、どうも母親の繕ったものらしい。

母親よ。どうして空を飛ぶ仕事をやるのにスカートなんだい？仕様か？仕様なのか？

なんて彼女の母親に聞いてみたいと思ったのも良い思い出だったりする。

まあ、そんな服を着こなしている彼女は一言で言えば美少女である。なんで天狗がこれ程までに可愛いんだろう？と脳内会議を行ったものの決定的な意見は出てこなかった。

可愛いから良いんじゃない？で満場一致である。もうどうしようもない。

人間もわざわざその容姿を見るために喰われに来るんじゃないか？

なんて思ったりしたのだがまあ、本当に命を懸ければそんな感情は変わらと思う。そう思いたい。

まあ、そんな彼女にビシッと格好良い敬礼をして、颯爽と山の頂上、天魔の元へと――

ガシッ

「頭悪いから……の間違いでは？」

「あ、うん。頭悪いから休んでも「行きましようか」……はい」

射命丸に半ば引きずられるように、俺はサボリ……基くい、休憩きゅうぎしていた木陰を後にして、まだ太陽の昇りきっていない空へと飛び立った。

紅葉。11月頃から山の木々は葉を紅く、黄色く染める。

紅く染まりきった葉を好きだと言う者もいれば、僅かに黄色がかった葉を好きだと言う者もいる。

雄大な自然の景色の中のうち1番美しい光景の一つとも言える紅葉。それが今、眼前に広がっていた。

まだ緑の葉も残っているから10月の中旬くらいか。そろそろライチョウの妖怪である俺の羽も冬羽に変わる頃である。

妖怪になってしまってから、随分と時間感覚が衰えてしまった。

木々生い茂る森の上空を飛びながら、なんとなくそんなことを思う。

「瑠衣さん、ちゃんと着いてきてますか？」

「はい」

目の前からの声に返事をする。一応、俺が上司で射命丸が部下なのだが、どうも幼稚園児と幼稚園教諭のように聞こえなくもない。

まあ、理由としては良く仕事をサボってふらふらと都を散歩したりしているからなんだが……。

どうしてこう鴉天狗は頭が硬いんだろうか？
俺には一切非がない。とは言わないが休暇の一つや二つ欲しいものである。

「もうすぐ着きますから」

「はい」

射命丸は高度を徐々に下げ始めた。どうやら進入者とやらが居る場所——火の粉やらが舞っている——に到着したようである。つてか見えてる。

伝わってくる妖気は先に出向いていた白狼天狗達のもとの荒々しい、木々を燃やしている妖怪のものであろう妖気。

でもどこか違和感も感じるんだよね。

「ちっ、増援!？」

ほら。

眼下ではある一点を囲むように天狗達が攻撃をしかけ、そのある一点には——

——人間が居た。

「人間……？」

隣で射命丸が驚いたようにそう呟いた。

うむ。人間である。

妖気があるもののそれ以外はほぼ人間と同一のもの。ついでに言えば、妖怪同士であればだいたい雰囲気で相手が妖怪であると判別できる。のだが、今回はそれがない。

いやー、困った。

服装から判断しても陰陽師でも無いというのに焼き天狗が一、二、三……六つも。まあ死んでないけど戦線復帰は難しいだろう。

炎やら妖弾やらが交錯していく。戦況は明らかに天狗達が有利。しかし、どうしてか怪我は天狗達の方が多い。

状況がさっぱり分からん。

奇襲でもされたのか？

と言っても奇襲で六匹もやられるのは考えにくい。

果たしてどんなトリックがあるのか。
聞いてみれば分かる。という事で。

「もし。これどんな状況かな？」

前から居たであろう男の天狗——客観的に見るとサボっている天狗——の一人に聞いてみる事にした。

「……え？　は、はい。あの人間なんですが、どうも——」

瞬間、人間の腕を天狗達の妖弾が捉えた。

「っ!？」

人間の腕が吹き飛び、僅かながら落ちた木の葉、地面に赤い液体が飛び散る。

人間は辛苦の表情でキッと殺気に向け天狗達を睨み、腕を抑える。

「——不死のようなんです」

天狗の言葉が呟かれた次の瞬間、人間の腕。えぐられていた部分は瞬く間に再生し、そこに傷があったとは思えない程の回復力を見せた。

「なるほど……」

確かに焼かれる時に血は出ないわな。

見落としていた人間の周りの血を見据え、納得する。

「瑠衣さん、私が行きましようか？」

「いや、俺が行くよ。彼等に退くように言ってくれ」
「分かりました」

天狗達が焼けた仲間を背負ったまま人間の追撃を躲し、飛び去っていくのを横目に見ながらふわりと降下した。
地面に足をつけると人間と視線が合う。

少女、である。

髪は白い。この時代の人間では珍しい。

15、6歳の身体だから、歳で白髪になった、という事は無いはずだ。

「なあ、人間。なんでこの山に入った？」

「っ！」

聞く耳を持たない。とはこの事だろう。飛んできた火の玉をバックステップで躲す。

「天狗達が住む山だって事は、麓の人間達も知っているはずだ」
「……………」

また飛んできた火の玉を今度は翼を羽ばたかせ横斜め上へ飛んで躲す。

話聞けよ。マジで。本気で。こうなると実力行使しかないじゃないか。

「あー、もう良い。
じゃあ問題。空気は温められると上へ行く。さて、上では何が作られるでしょう？」

バツと少女は上を向く。

温められた空気は次第に涼しい方へと進む。つまりは空。

高度が増すにつれ、空気は冷やされ、その空気の含んでいた水分は

――

――雲になる。

山は天気が変わりやすい。

今言う事じゃない気もするが、些細な気流の変化で山は雨になったり、晴れになったり、雷になったり。

山火事が起これば、ほぼ確実に雨が降るのはそういう理由からだ。

「雨が降りそうだな。どうする？ 続けるか？」

「うるさいっ！」

火は水によって消される。誰だって知っている事。

これは目の前の少女にも当て嵌まる事だ。

しかし、少女は攻撃を続ける。まあ、確かに今雨降ってないんだけど。

火の玉を躲しながら、わざわざ説明する俺。かなり偉そうである。
うん。やめよう。

ポツリポツリと雨音が聞こえ、身体にも何滴か雨の雫が降りかかる。

これで退いてくれると良いんだけど……
退かない、よな。

どこかで眺めてる天狗達も見逃してくれなそうだし。

むう。やるしか……無いか。

絶え間無い攻撃を避け、ようやく見つけた隙に空を見上げる。

もう……大丈夫だね。

不意に瑠衣は手を掲げた。

「?」

攻撃してこない事で警戒を強めていた少女は、瑠衣の突然あげた手を凝視し、身構えた。

その次の瞬間、雲が濃くなるにつれ暗くなっていた世界は強烈な光に照らされ明るくなった。
そして――

――紅葉の映える天狗達の山に、轟音と共に光は落ちた。

「……大丈夫か？」

まあ大丈夫なはずが無いんだけど。上手く気を失ってないか心配である。

雷が少女に当たったのは間違いなくこの目で確認した。まあやり過ぎたかな……と苦笑する。不死だから、と操作もままならないモノを使ったのは失敗だった。彼女が炎を使ったのが、俺には好都合だったというのが正直なところなのだが、威力がここまでとは……。正直、びっくりである。

雷は雲と地表の電位の差から地表に落ちる。

俺はただ少女の近くの地面と雲の電位を弄っただけ。個人の力で何も無い所から自然の雷と同等な雷を落とすなんてそんな事、俺の能力では無理、である。

『電気現象を起こす程度の能力』

それが俺の能力。

静電気やら電磁誘導やら、条件さえ満たせば大抵の事はやってのける。ほとんどが戦闘に役に立つ事は無いけど。

「溜衣さん。終わりましたか？」

恐る恐ると俺の隣に降り立った射命丸。

今の雷で終わったと踏んで飛んできたんだろう。

「うん。他の天狗達は？」

「え、えっと……」

「あー、言わなくて良いよ。射命丸も先に戻ってると良い。天魔には俺が遅くなる事を伝えてくれると助かる。」

「は、はい」

聞き終わるやいなや、彼女は黒い翼を羽ばたきアツと言う間に山の頂上に飛んでいった。

「さて、麓まで連れていこうかな」

目線の先の少女。焼け焦げて真っ黒のはずの身に纏った麻の服は何故か新品で、少女は白い肌を曝すことなく、その場に横たわっていた。

は！ け、決して期待してた訳じゃないんだからな！

……やめよう。男のツンデレは見苦しい。

ピクリとも動かない彼女の首の後ろと膝の裏に手を通して持ち上げる。

俗に言うお姫様抱っこ。

果たして寝てる少女に許可なしでやって良かったのか？

ま、まあ、してしまった後に考えても仕方がないし……。うん、仕方がない。仕方がないよね？

雷の衝撃によって周りに燃え移った火。それを消すべく雨は降り続く。

雨に濡れながら、瑠衣は白髪の少女を抱え、山を下りていった。

天狗達の社会（後書き）

※ライチョウ

ライチョウは高山地帯に済むキジ目の鳥で日本では特別天然記念物に指定されている。

夏羽（黒）と冬羽（白）と色の変化をするのが特徴。

10月頃から夏羽から冬羽へと変化を始める。

一部Wiki抜粋

お読みいただきありがとうございました。

能力、被ってるなあ。大丈夫かな……汗

では、また（＾Ｏ＾）ノシ

はぐれ者の友人は、はぐれ者（前書き）

2話になります。

はぐれ者の友人は、はぐれ者

「う、ううん……」

「あ、起きたか」

あれから半刻した頃か。少女が目を覚ました。

上半身を持ち上げた少女はこちらを見、目を閉じて、こちらを見て、三秒程動かなくなると

「へ？」

まるで幽霊を見たかのような目で疑問の声をあげた。

「おはよう」

「いや？ え？」

まだ状況どころか現実かさえも理解出来ていなそうな少女に思わず苦笑する。

妖怪の山の麓。山の頂上付近とは違い、麓の木々の葉はまだ染まり始めたところ。そんな僅かに黄色染みてきた葉を付ける木々が周りを瑠衣と気を失った少女が居る空き地を囲んでいる。

少女が起きるまで山を見上げていたが、どうやら山の火は雨によって鎮火したらしい。何箇所から煙はあがっているものの、それらしい炎は見えない。

辺りを再三再四見回し、少女はようやく状況を理解したらしい。殺

意のこもった目が俺を捉えた。

「……なんで助けたの」

「？ ……助けてないよ。ちゃんと殺した」

「そ、そうだけど私はっ！」

「不死なんだろう？ ってか、えぐられた腕が再生したの見たんだから気づいてるさ」

「あ、う、うん」

怒鳴ろうと乗り出した身体を縮こめて弱々しそうに少女は頷いた。

「で、でもなんで私を麓まで……？」

「独断」

「ふえ？」

「……あー、やっぱり忘れて。不死を喰ったら腹で再生するんじゃない、って天狗のお偉いさんが言ってな。しょうがないから連れてきた」

まあ、照れ隠しである。

言い終わって少女に言うべき言葉じゃなかったなあ、と顔をしかめる、が。まあ、少女を見ても悲しそうな顔をしている訳でも無いのでよしとしよう。

「ともかく、お前は助かったって事。さっさと人里——は無理か。この山から離れてくれ」

「うん。分かった。あなた妖怪にしては良い奴なのね。驚いた」
「あー……」

妖怪にしては良い奴、ね。どうせ基準は人間を喰うか喰わないかの違いだろ。

まあ、人間を喰う奴が悪い。というのは人間側からの見解だろうし、妖怪は妖怪でイロイロと人間との持論の食い違いがあるのだ。

一番有名———というか、天狗達が良く言うこの食い違いについての言葉は、

『人間にとっての魚が、妖怪にとっての人間』

少しアレンジした部分もあるけど、だいたいこんな感じである。

要するに、人間が魚喰ってんだから自分達妖怪が人間喰っても構わんだろう、という文句である。

被害者面する人間共が……とか呟いていたから余程頭にきていたようだった。

「ど、どうしたの？」

つまらん事を考えているうちに、時間は過ぎていたようだ。少女が心配そうに顔を覗き込んでいた。

先程まで殺しあっていた相手にここまで気を使うのはこの少女が優しいからか、はたまた馬鹿なのか。

心配してもらって馬鹿というのは些か失礼だが。

まあ、前者であろう。

別に考えていた事を彼女に話す理由も無いので。

いや別に。と決まり文句のような言葉で彼女の意識を流す。

「そういえば名前聞いてなかったよな」

話を逸らすにしろ、もう少しましな切り出しは無かったものか。別

れ際に名前を聞いてどうするんだか。

「あ、うん。そうだったね。私は……妹紅だよ」

少しの沈黙に、やや疑問を持つ。名字、この時代なんと言うかは知らないが。それを名乗るのに問題があったんだろうか。

「俺は溜衣。——ライチヨウの妖怪」

「ライチヨウ……？」

「えー、ああ。らいの鳥の妖怪だよ」

「そうじゃなくて、雷鳥天狗なんて居たかなって、思ってたさ」

うん、居ませんね。確かに。だけど説明がめんどくさい。今すぐ山に飛び去りたいくらい。

「居るよ？」

という事で居る事にした。

「そうなんだ……」

納得する少女——もとい妹紅。

少し良心が痛む。

そもそも妖怪に良心があるかは知らんけど。

あると思えばあるし、無いと思えば無いって事で良いんじゃない？
って事にする。

「ああ。珍しいけどね」

すると妹紅の表情が見て取れるくらいにくもる。

そして、ひとつ息を呑んだ後、口を開いた。

「……それじゃあ、瑠衣も独りなの？」

「……え？」

突然の彼女の問い。

俺は一瞬呆然とした後、驚きの声をあげた。聴覚で感じた事に思考が追いつくはずもなく、訳も分からず彼女を見据えると真っ直ぐな瞳と視線が合った。

「ねえ、どうなの？」

「どうって……まあ確かに他の天狗達と壁はある……よ？」

流されるまま。そう答えた。

「……そうなんだ。……変なこと聞いてごめんなさい」

「あ、ああ……」

それっきり妹紅はもちろん、瑠衣も口を開かず、物音すらたたない時間が続いた。ただただ山から下りてくる風が木々を揺らす音だけが耳に入ってくる。

嬉しそうであり、悲しそうな、形容しがたい妹紅の表情を横目で見ながら俺は、でも、と切り出した。

こちらへ向いた妹紅の視線に苦笑して答え、続ける。

「頼れる奴が一人居る。安心して腹を割れるような、ね。そいつは忙しいから、会うこともままならないけど、会える時はそれはもう楽しいんだ」

言い終え、一息ついて。俺は嘲笑した。自分自身に。

俺、なに話してんだろ……。あいつが聞いたら絶対笑う……。
だけど言ってしまったからには、最後まで言おう。

「妹紅にもそういう奴が出来れば、もう少し不死ってのが辛くなくなるんじゃないかな？」

「……………」

黙り込む妹紅。

これから日本を歩き回るんだろから、どこかで人間好きな妖怪に
会えるかもしれない。そんな奴と友人に——親友になっていけば
良いと思う。

だから……

「……溜衣。で、出来れば友達になって欲しいんだけど……駄目、
かな？」

「は？」

妹紅がそう言った瞬間、時間が止まったような気がした。

「いや、え？ 何故に？」

「えっと、そ、それは……溜衣優しいし、色んな事教えてくれたか

ら……」

「……ど、どうも」

照れるではないか！

顔合わせて言う事じゃ無いだろう。ま、まあ嬉しいんだけど……赤面してしまっている自分への羞恥心に負け、逃げ出したい自分を抑えつける。

「だけど俺で良いの？ 一応妖怪だし、お前を喰うかもしれないんだぞ？」

「大丈夫。本当に喰おうと思ってる人はそんなこと言わないよ」

人、では無いんだが。

「あー……、うん。分かった。よろしくな、妹紅」

「うん」

照れ臭そうに二人とも頬をかきながら、苦笑いする。

「これで友達になれたのかな？」

「さあ？ 友達ってのは本人達がそう思えばそうなんじゃないか？」

って、よくアニメの主人公達が言ってた。……はず。

「まあ、日も沈みそうだからまた明日……は忙しいから明後日だな。またここに居てくれれば飛んでくるよ」

「うん、分かった」

苦笑混じりに頷く妹紅。

さっさと山から離れてもらうはずがこうなるとは全く思わなかった。

ましてや『友達』とは。人生……妖生？分からないもんだね。
あれ？今、良いこと言った？

……そうでもないですね。分かります。

まあそんなこんなで別れの言葉を済ませ、俺は山の頂上へ、妹紅は
秋に染まりだした森の中へと消えていった。

「友達、ねえ。妹紅の奴、妙に初々しかったんだよな。友達いなか
ったのかな？いや、性格も顔も良いし。……もしかして嫉妬って奴
か？

……この時代でも子供の感情ってドロドロしてるんだなあ」

勝手に頭の中でそういう結論に至り、苦笑いする。もちろん、全く
をもってこの結論に信憑性は1ミリも無い。

「……ん、疲れたしさつさと寝よう」

瑠衣個人専用に作られた掘っ建て小屋。瑠衣はそこに住んでいた。
天狗達の住む家々とは山の頂上を対して反対側にあるそこには天狗

達はほとんど立ち入らず、彼等と柵しがらみのある溜衣にとっては、絶好の住家だ。

住み慣れたその小屋の前に降り立ち、大きく背伸びをする。

明日も仕事かゝ。

なんか仕事妖怪になりそうだよ。

ガチャリと扉を開けて家に入る。

「あ、お帰りなさい」

するとグデーツと気持ち良さそうにベッド（自作）でくつろぐ射命丸が。

「……射命丸、ここ俺の家。それ分かってる？」

「あ、はい。もちろんです」

「じゃあなんで普通にくつろいでたのかな？」

「失礼な。どこからどう見ても溜衣さんを待っていたようにしか見えなはずですよ」

「そうか。じゃあ俺の目がおかしいんだな。待ってろ、一度目を閉じれば……」

パチリと目を閉じ、間髪入れずに目を開ける。

「なん……だと……」

目を開くとそこには椅子に行儀良く座りこちらへ向けて微笑んでる射命丸が……。

「ほら、ちゃんと私が椅子に座っているのが見えるでしょう？」

「ぐぬぬぬ……」

ドヤ顔である。悔しいのである。

「……んで、何なの。わざわざ俺の家まで来て……」

不機嫌さを晒し出す俺。そんなのどこ吹く風、とばかりに射命丸は表情を変える事なく口を開いた。

「ああ、そうでした。天魔様から伝言です。

『明日、仕事を終えたら私の自室に来るように』
との事です」

「……あい、分かった。……でもこの時期に何だろう？ あいつ忙しいはずだよな」

確か大天狗達から仕事押し付けられたって嘆いてたのが、ついこないだだったから、まだ多忙のはずである。

その中、こうした呼び出し。何か重要な事でもあるのだろうか。

「そういえば――」

一人、考え事をしていると、帰ろうと扉に手を伸ばした射命丸が思い出したように口を開いた。

「『あの人間とどうなったのか。面白そうだから問いただしてあげるよ』

とも言っていましたね」

「は？」

いや、なんともまあ。
嫌な汗が額に垂れる。

ドシテ？ ドシテアイツシッテルノ？

「いや、驚きましたよ。仕事に戻らせようと麓まで飛んで行ったら、嬉しそうに笑いあってたんですから……」

ニヤニヤと嬉しそうな笑みを浮かべる射命丸。

き、貴様か……

貴様が元凶なのか……。

何度も言うけど、俺上司なんだぜ……？

「伝えたのはあいつだけなんだよな……？」

「そういえば大天狗様達に言ってますませんでしたね」

射命丸はああ、そうだった。と手を叩き、扉に手をかけ開けようと

――

「ストッププッ！！」

「……？？？」

聞き慣れない横文字にクエスチョンマークを浮かべる射命丸に頭を下げる。

「頼む！ それだけは勘弁してくれ。永遠にぐちぐち言われるのは（精神的な意味で）嫌なんだ！ アイツらの顔も（現在進行形で）見たなくなる！ 頼む！ なんでもするからっ！」

「本当ですか？」

「あ、うん……」

ちらり、と視線をあげ、彼女の顔を覗くとそれはそれは良い笑顔をを見せてくれていた。

……ああ、嵌められたか。

「それでは仕事を怠けないと誓ってください。もちろん破ってはいけませんよ?」

「期間は?」

「一生」

「……無理」

「男に二言は無いのでは?」

「無いよ。……たぶん。……ああ、もう分かったよ。誓います、誓わせてください!」

……数年経てば忘れるだろ。どうせこいつも昇進してどっか違う隊にいくだろうし。

ちなみに俺と射命丸が属する———というか二人だけなんだが———隊は遊撃隊。天狗社会の頂点である天魔直属の部隊。

大天狗の声一つでどこへでも引っ張り出される、名ばかりの便利部隊と思ってくれば良い。

「宣誓書も持ってきましたので———」

「泣いて良いですか?」

「?」

きっちりと書かれたそれに書き込む部分は一つ。名前の欄だけである。

これに名前を書いたら、後々口約束だったろ? なんてごまかす事も出来なくなる。

予めこういう物を用意していたとは……こいつ、こうなるのを分か
って……。

この時代、高級品である和紙を使っている辺り。どうせ天魔あいつも関わ
ってるんだろう。

なんて策士……孔明の罠、基射命丸の罠か……。

不満である、と主張するように射命丸を睨んでみるも、依然として笑顔を見せてくれる。

逃げられそうに無いなあ……諦める、か。

いやしかし。これで将来が決まるようなものだ。もう少し考えて――

「早くしないと――」

ニコリ、と素晴らしい笑顔を見せる射命丸。

いつからこう腹黒くなってしまったんだろう。一ヶ月前はあんなに清く正しい、て感じの雰囲気だったのに。誰のせいかな、と聞かれれば、俺のせい、と答えるしかないんだが。

「分かったよ……」

名前の書かれた和紙を懷に仕舞い、颯爽と家を出ていく射命丸。その後ろ姿を、俺は涙目で見送った。

はぐれ者の友人は、はぐれ者（後書き）

そろそろ学校が始まるので更新は週一くらいになりそうです m
┌ m

お読みいただきありがとうございました。

天狗達の頂点(前書き)

夏休み

さっさと終わり

またテスト

うん。つまらない。だが字余りが無いのがびっくりだ。まあこんな心境で書いたのではっちゃけてるかも……

天狗達の頂点

「……うーん」

翌日の申の刻。瑠衣は櫓けやきで作られた廊下を歩きながら頭を抱えていた。

昨日の呼び出しに応えようとわざわざ屋敷程の大きさである天魔の家に来たのだが、天魔に質問される内容を予め考えておこうと思ったのだ。

俺と妹紅の関係、ねえ？

あの時は慌てて良くは考えて無かったけど、そこまで他言するのが恥ずかしい関係、って訳でも無いんだよな。『友人』な訳だし。

これといって天狗に（いや、人間にも）友人が居ない俺だからこそ、笑いの種になるかもしれないけどあいつは笑う奴……だね。うん。

そんなこんなで目的地へ着いてしまった。

どうしたものか、と立ち尽くす。

まあ、こんなこと考えてもメリットがある訳でも無い訳で……結局はその思考を振り払い二度部屋の扉を叩いてから口を開く。

「瑠衣です。お召し通り参上しました」

「入って」

ガサガサと物音がした後、部屋の中から声が響く。

その声を聞いて、扉を開ける。

部屋の中を見回せば、まるで此処が最高の部屋だと誇張するかのような鈍く光る檜ひのきの床。

その上にはぐちゃぐちゃになった和紙の数々。その山の隣にある床と同じ材質の机。そこに彼女は座していた。鴉天狗だという事を誇張する黒い大きな翼が、主人の体調を表すかのようにシヨボンと垂れている。

机に突っ伏している少女。事実上、天魔——天狗の頂点とも言われる彼女は、だらし無く着物を着崩し、見ていれば吸い込まれそうな髪を垂らす。名を楓と言い、公の場では無いという条件でかぎられてくるものの親しい者は彼女をそう呼ぶ。

「大丈夫ですか？死にそうですけど……。仕事がお忙しいようですね」

苦笑しながらそう声に出し、自らが開けた扉を閉める。そして

「……で、昨日のあれ。射命丸に指示したのお前だろ……。？」

数秒前の敬語は何だったのか。そう思わせるような敬意の見られない口調で天魔にそう投げ掛けた。

すると天魔は俯せた顔を持ち上げ不満げに顔を歪め、

「毎回思うんだけどその変わり様は凄く不自然だよ……」

「うん。分かってる。でも大天狗に楓に敬語使っていないの見られたらめんどくさいんだぞ？」

それぐら分かってくれ。とかなり遠い目をする瑠衣に天魔——楓は苦笑いを浮かべた。まあ、大天狗達と瑠衣の関係がかなり悪い事は衆知の事実である。故にここに他の——例えば射命丸が居たとしても楓と同じ表情をしたであろう。

「さっきの質問だけど、なんでそう思ったのかな？」

「あのなあく。だいたい射命丸が勝手に他人の家に入ってくるはずが無いんだよ。射命丸に限らず誰かさんを除けば鴉天狗は頭が堅い奴ばっかだからな」

ああそれ？と当然のように語る溜衣の論は客観的な立場で聞いた楓でも頷ける内容であった。

「アハハ、確かにそうかもね。誰かさんって言うのは私？」

「当然。楓は、はっちゃけ過ぎ」

「えへへ、照れるなあ」

「褒めてないやい」

まったく……どうしてか楓は他の鴉天狗と違い頭が堅い、という事はない。本人曰く、大天狗達から投げられた仕事が貯まりに貯まり。空回りしたらいつの間にかこうなっていたらしい。ストレスにやられたようである。

その御蔭で俺が此処に居る事になっているのだが。行く宛も妖怪などの知識も欠けていた俺にとっては天狗社会に入って正解だった、と今更ながらに思えた。

「それでどうなったの？指示はしたけど結果は聞いてないんだよね」

もう答えは分かるよ。という表情であるにも関わらず、そう聞ってくる楓に溜衣は溜息を一つつき、

「……射命丸は意気揚々と帰っていったよ」

「アハハ。やっぱり上手くいったんだ。溜衣は文に甘いからね」

遠回しに告げた答えに楓は嬉しそうに笑った。第三者なら見惚れる

かもしれない笑みであつたが、俯せた状態の顔は些か不格好に歪んでいた。

「うるせい。一人しか居ない部下に甘くて何が悪いんだよ」

口を尖らして反論するが、楓は2828と口を緩ませからかうように視線を向けてくる。

むむむ……。話し相手があいつしか居なかったようなもんなんだから仕方ないじゃないか。

「ああそうだ忘れてたよ！ 昨日のあの子とは何処まで行ったの！
？ 文は良い雰囲気だったって言ってたけど」

やつと来たよ。

目に見えるようにそう顔で表現する。元々の用事がこれだと聞かされていたのもあり、まだかまだかと待っていたりした。

「ただの、友達だよ」

「……………」

考えた挙げ句。正直に伝える事にした。

そう告げた途端、楓の表情が固まる。

かなり失礼である。

「……ふえ？ いま何て？」

やや頬を引き攣らせ、答える。

「友達って言ったんだよ」

「う、嘘……」

「お前それが信じられないくらい失礼だって分かってるよな!？」
「うん」

こ、こいつううう。

ぶるぶると震える拳を理性が抑える。

怒ってますよアピールをしても楓は笑うばかり。

「でも驚いたよ。良かったじゃない」

「……うん」

ニヤニヤしていた笑みを消し、打って変わって楓はまるで母神のような優しい笑みを浮かべる。

本当に表情の変化——いや演技か?——が激しい奴である。

御蔭で殴りたくなってた気も萎えた。

「私としては天狗の友達を作って貰いたかったんだけど……」

「無理!」

「……だよねえ」

俺の間をおかない答えに楓は苦笑。

大天狗はもちろん。天狗の大半は排他的な奴が多い。そんなところに同じ種族でない俺が飛び込んだらそれこそ病む（精神的に）。

「文はどう? あの子、君を嫌ってる様には見えないけど……?」

「そんな事言っても、お前の命令でわざわざ俺の部下になってる訳で、どうも避けられてるような気がしなくもないんだよね」

「……ふーん」

どこか楽しそうであった楓の表情は一転。彼女は割と真剣そうに頷き。

変わらず真剣な目を俺に向け、聞く。

「瑠衣、文が君の事を嫌ってるとでも思ってるの？」

「え？急にどうしたんだよ！？」

「どうなの？」

「……いやまあ、そうなんじゃないのか？」

楓からの圧力に圧され、繕うこともない自分の言葉が声に出てしまった。

すると、それを聞いた楓は大きく溜息をついた。

そして呆れの視線が俺に突き刺さる。

「例え話をしてあげる。

……昔あるところに一匹の天狗が居ました。その天狗は一般の家庭に生まれたにも関わらず、その能力は目を見張るばかりのものでした。最初こそ、ちやほやされていた彼女。それこそ鼻が高くなっていた彼女でしたが、彼女達の上の職につく大天狗は、それを快くは思わなかったのです」

「……それを聞かせて俺にどうしろと？」

「ちょっと待ってよ。最後まで言わせて。」

大天狗にとって自らの権威を奪い取りかねない彼女は虐げられ、次第に彼女をちやほやしていた天狗達も彼女から離れていき、不自然な両親の死により、彼女は独りになってしまった」

「……………」

「どう？ 作り物染みた話だと思わない？ これが本当の話なんだよね。まったく、悪役染みた大天狗じゃなくて主人公っぽい天狗

でも居ないのかな？」

「……他人の事だろ。それにもう解決した話だ。俺には関係無いよ」

「彼女を虐げた大天狗。それがまだその職についてるとしたら？」

「……はあ、仕事ならそう言えば良いじゃないか」

納得した。なんでわざわざあんな例え話をしたのか。

瞬間、楓はケロリと笑顔を見せる。

「それはホラ。君のやる気を上げる為にさ」

「あーがとーござーました」

「うん。よろしい。仕事内容は大天狗の弱みを一つ握ってくることに。それにつけ込めば当時の証拠なんかもゲロッてくれるでしょ」

「はいはい。了解しました」

肩を竦めた後、踵を返す。まさか、からかう為だけの会談で仕事を押し付けてくるなんてビックリだよ。

むしろこの時代から裏方の仕事があったなんて。そこからビックリだったりする。天狗の社会だけど。

「ああそうだ」

部屋の扉に手をかけようとした時、後ろから声が響く。

「言いたい事を忘れてたよ。文が君の部下に居るのは私の命令だからじゃないからね。」

「……あーそれと、今日聞けなかった事はまた今度聞くから」

あーそれと……ってのは明らかに蛇足だって。

……射命丸が俺の部下なのは楓の命令だからじゃない、かあ。……
期待しちゃう自分が居るのはなんでなんだろうな？

部屋を出る瑠衣の顔がどことなく嬉しそうであつたことを、後に楓
が文に面白可笑しく語るのは完全に余談であろう。

天狗達の頂点(後書き)

内容薄いのにとそのために四千字くらい。良いのか、悪いのか……

無駄な表現が多いのかな？

教えてくれると嬉しいです。

償えてないんだから仕様が無い

楓の呼び出しに答え、彼女の屋敷に行った翌日。瑠衣は天狗達が統治する山の麓に来ていた。

ぶっちゃけ妹紅に会いに来たのだが、彼女と別れた木々に囲まれた開いた土地には彼女は居なかった。

あれ？ 日にち間違えたかな。

それは困る。折角あの射命丸を説得して休暇を得たのだから。どのくらいの時間説得を試みた事か。1時間——は言い過ぎだが、そのぐらいやってたようにも思える。

忘れてたりは……してないよね？

それはそれで困るどころか泣ける。初めて遊ぶ日にすっぱかされたなんてたまったもんじゃない。

事実。時間等は決まっておらず、自分が先走っただけだったため。瑠衣は待つことにしたのだった。半刻経過——

「……………」

半涙目で広場を見渡せる位置に立った木々を背に、瑠衣は座り込んでいた。

待ちぼうけを通り越して黄昏れてしまっている彼の心はどこかへ飛んでいっていた。その目からはどこか哀愁を感じさせる。

「……ん？」

ふと意識を取り戻す。なぜなら、音がしたから。

誰かが何か重い物を引きずっているような――

反射的に音とは反対の木の影に隠れ、目立ちやすい羽も仕舞う。まさに擬人化。といっても、これは相手に気づかれないようにするため。人に成り済ます訳ではない。

ガタガタと重い物が地面の僅かな傾斜に揺られる音が次第に大きくなってくる。まるでこの場所を目指しているように。一寸、妹紅か？と考えるも彼女が引きずる様な物を持っているか。と言えど否、でありその可能性は無いに等しい。先日会った時も特にこれといって持っていなかったし。

ともかく、思考を停止し息を潜め。音の主が来るのを待った。

「まだ来てないのかな？ ……良かった」

ホッと広場の端まで来た白い髪の少女は安堵の息をついた。

「……」

なんだ杞憂だったのか。

否定した可能性。それが案の定であった。

まあ、備えあれば憂い無しという言葉もある訳で。まあ、何事も無いに超した事も無いし。

別に俺、「待った?」「いいや全然」って言う彼女彼氏がやる下りをやりたかった訳でも無いし……? 別に悲しくなんかないんだからね?

スツと立ち上がり、広場に出ていく。するとこちらに気づいたらしい妹紅が少しはにかみながら笑顔を向けてくれた。

「こんにちは」

「うん。こんにちは」

挨拶を済ませ、それなりに彼女の近くまで来た所でそういえば、と視線を妹紅に後ろに向ける。

かなり不格好なものだが、だいたい雰囲気でそれが何かは分かった。

「えっと屋台……だよね?」

「うん。瑠衣に言われたから人に少しでも関わろうと思って——」

「自分で?」と聞くと首を縦に振る。華奢な少女が屋台を作っている姿を想像しがたいんだが。まあ、作ったと言うのだから作ったのだろう。

そもそも屋台ってこの時代にあるのか? 良くは覚えてないけど、屋台が出てきたのはもっと後——江戸あたりだったような気がする

けど。まあ、本格的な屋台がその頃からで。初期的なものはこの時代からあったとも考えられる。

「ふーん。何の店なんだ？」

おでん、という事はないだろう。これも確か江戸の頃に始まったはずだし。焼鳥も確かそうだ。かき氷など論外だろう。焼きそば――は知らないな。もしかしたら焼きそばかもしれない。

「焼鳥のお店よ」

……ほ、ほう。あえて九百年の時の壁をぶっ壊すのか、お前は。よく分かった。

「？」

射命丸と言い妹紅といい、どうして時代を吹っ飛ばすんだ？確かに俺が居た世界の過去と当て嵌めて考えるのは間違いかもしれない。もしかしたらパラレルワールド？とか言う世界かもしれないのだから。

妹紅は良い。商品化が正式に認められたのが江戸だっただけかもしれないし。

だけど、だ。射命丸のあの服装はおかs（ry

「瑠衣、どうしたの？」

「……なんでもない」

――考え事はよそう。

「焼鳥、駄目だったかな？」

「いや、そんなことないよ」

「それじゃ食べてくれるかな？お客さんも居ただけど評価っていう評価はしてくれなかったのよ。私はそれなりに美味しいと思うんだけど」

「ああ分かった。それなりに味には五月蠅いからね。ちゃんと鼻屑ひじき無しで評価付けるから覚悟してね」

なんて偉そうに言ってみるけど、まあそこまで詳しく無かったり。前世で洋風レストランの料理長である父に少し教えて貰っていたぐらい。明らかに洋風に焼鳥は専門外だし、何よりこの体になって味覚も変わってるだろう。

まあ、少しでもアドバースできたらなく、程度の感覚だったりする。

「あ、美味い……」

「そっかあ。良かったあ」

数十分後……

俺と妹紅はカウンター越しに座っていた。

俺が思わず口にした言葉に妹紅は顔を綻ばせる。

食べ終えて何個か質問した。

たれはどうやって？ と聞くと、私が何時間もかけて味見を繰り返し作って作ったんだ。と胸を張り、

串は……と聞けば、私が削って作ったのよ。と嬉しそうに笑みを零した。

彼女が自信を持てたのなら、まあ良かったんだと思う。……が、食べる前にあんな事を言ったのに、何のアドバイスもしないのは……ね。

なので、未来の知識。というジョーカーを切り、肉の間に葱ねぎを挟んでどうか、と助言した。
流石未来の知識ずるい。

今度作る時は最初に食べさせてあげるよ。と妹紅に言われた時は、なんて優しい娘……と泣き崩れたりもした。うん。
本気で心配されたけど。不憫な子を見る目で。

「それでさ、射命丸の奴口あんぐり開けてボーツとしててな……」
「ふーん。天狗も凄く人間くさいのね」

屋台の後片付け等を終えた後、二人は話に華を咲かせていた。
木の幹を背に、話を続ける。ちょうど木を対称に反対の位置から聞こえた彼女の声は話の続きを促すように聞こえなくなった。

「それでな！……」

……

.....

...

色々な話をした。聞いた。妹紅から聞いた話。
天狗の山に来るまでの波瀾万丈な道中に始まり、

——かぐや姫の話まで。

かぐや姫。

平安の頃に書かれた日本最古の物語。

『今は昔、竹取の翁というものありけり』

という有名な冒頭から始まる『竹取物語』に登場する月の姫である。
作中では絶世の美女で、帝からも婚約を迫られていたとも書いている。

まさか、竹取物語に書かれている話が本当にあるとは。それを知っていたら、仕事の合間に一目でもその『かぐや姫』を見に行つただろうに。興味本意で。

まあそれはそれ。

妹紅の話は続く。

『五つの難題』

確か求婚してきた五人の貴族にかぐや姫が出した無理難題だったはず。これを持ってきた者と結婚する。という条件で。

そして、『蓬萊の玉の枝』

『五つの難題』の内の一つ。未来では中学生の教科書にも載っていた。この難題を受けたのは、藤原 不比等^{ふひと}。がモデルとされた人物。かぐや姫が実在しているというのだから、藤原不比等がモデルではなく、難題を受けたのが藤原不比等本人である可能性が高い。

『蓬萊の玉の枝』

東の海にある『蓬萊山』に存在する根は白銀、茎は黄金、実は白玉で出来ているとされる枝。

それを不比等は口封じをした職人を雇い、造らせ、かぐや姫に献上した。しかし、その場に造らせていた職人達がなだれ込み、不比等は人望を失った。とされている。

妹紅が語ったのはそれとかなり類似した話だった。

「アイツのせいで父上は曝し者になって……それで……」
「まだお前のかぐや姫を怨んでる……か？」

妹紅はコクりと頷く。

ふう、と俺は息をついた。

色々話を聞いて驚いた。言外で妹紅が大貴族出身だと分かったり、確かに礼儀作法はやけに出来ていたからもしやとは思っていたけど。

「人は誰だって百年も経てば死ぬ。けどお前は違う。不老不死なんだろう？」

視線を妹紅に向ける。

彼女は口を開かない。

「だったらさ。探せ。探して探して。見つけたら散々言ってやれば良い。無理に抱えるよりそっちの方が良いに決まってんじゃない」

「……そうだけどアイツは」

「月に帰った、か？それともかぐや姫は寿命で死ぬだろう、か？」

「……心でも読んでるの？」

「俺にそんな技術なんかないよ。まず月に帰ったっていう点に関しては、お前が月に行ってやれば良い。二つ目の答えにも重なるけど、人間達の技術が向上すれば月に行くのだって出来るようになるさ。二つ目は勘なんだけど、多分かぐや姫も人であって人じゃないんだよ。だいたい、二三年で赤ん坊の姿から立派な女性の姿になるなんて普通の人間じゃ有り得ないだろ？竹から生まれた……ってのも普通じゃ無いし」

ニツと笑みを浮かべる。なにもそれが本当だなんて思っちゃいない。一割確率があれば良い方じゃないか？

「……うん。そう……だね。私がこんな身体になったのも元はと言えばアイツのせいだしね」

そう言って妹紅はにこやかに笑った。

真事実発覚！ 妹紅の不老不死はかぐや姫のせいだった！

そういえば富士山の頂上でかぐや姫が帝に献上した不死の薬を燃やした。って話もあったけど、その不死の薬なのかな？

「まあ、前向きにやっていこうや」

「うん……。会った時はぶっ殺してあげるんだから！」

「ああうん。頑張って」

苦笑混じりに呟き、ホッと息をつく。しかし何故だか、安心してはいけない気がした。

不安に曝され、辺りを見回し、空を見上げる。

太陽はやや西に傾き、サンサンと地上を照らしている。そんな太陽が輝く青い空。そこに黒い影が一つ——黒い影？

「伏せろっ！！」

「っ！？」

腕を掴み、無理矢理地べたに伏せさせる。

次の瞬間、黒い影は突風を伴い、十数メートル離れた場所に砂煙を巻き上げて着地した。

近づいて来る砂煙越しに見える影。一定の距離まで近づいてくるとその影は止まった。

「着地を失敗するなんて、私もまだまだ未熟ですね。それにしても驚きました。休みを貰ったので、山を廻っていたのですが、まさか上司が人間と遊んでいるなんて」

呆れたような表情で現れた彼女は呟く。

「うるせえ。休みに何してたって良いだろうが。射命丸」

「……………まあ良いですけどね」

数秒見定めるような視線を俺に向けた後、射命丸はため息を吐いた。
着地時に服についた砂を掃う。

「えっと、戦わなくて良いの？」

「ああ。こいつは天狗の領域に入らない限りはほぼ無害だよ」

戦闘体勢を取っていた妹紅を俺は止めるよう促す。

力を抜いた妹紅を見てから射命丸は視線を俺、妹紅の順に向ける。

「人を害虫扱いしないで下さい。……………それにしても、三日も二人で遊ぶ御予定とは。お二人はどこまで？」

……………妹紅、気付いて無い、よな？

「……………」

「三日？ 私達が遊ぶのは今日だけだよ？」

案の定。妹紅が口にしたのは俺が危惧していたものだった。

それに、妹紅が全く動揺しないのはなんでなんだろう。俺、男として見られてないのかな？

期待はしてなかったけど、少し悲しい。

「今日だけ？ 三日間仕事は休業だと聞きましたよ？」

射命丸の視線だけがこちらに向く。「言わなきゃ殺す」って視線。

「えっと、ほら？　ね？　その……そうだ！　都を散歩しようかな、
って思ってたんだけど、射命丸もどうかな！？　……なんて」

必死に笑顔の仮面を顔に貼付ける。背中をつたう汗。

「嘘ですね」

バツサリ切られた。

「……まあ嘘なんだけどさ。……お前に隠しときたい事なんだよ。
それでも聞きたいか？」

「……」

数秒の沈黙。

話が掴めない妹紅も口を開く事はない。

瑠衣と射命丸の視線が交錯する。

「……言っして下さい」

「はぁ。お前も大概だな。人の事は言えないけど……。妹紅、悪い
けど少し外してくれないか？」

「……分かったよ」

承知した、と頷くと立ち上がり、彼女は屋台の方へ歩いていった。

「さて、改めて聞くけど後悔はしないか？」

「もちろんです」

目に揺らぎは無い。

俺の言葉を聞いて彼女は自ら志願するだろう。それは止めないといけない。

「残りの二日間。俺は天魔に直接頼まれた仕事を遂行する。仕事内容は一——」

瑠衣から聞かされた内容。それに射命丸は身を固めた。自らの親の敵。自分の不幸の元凶。それを処罰する証拠を探して来るもの。

彼女から、ふと笑みが零れた。

「なんで言わなかったんですか！？ そうならそうと言ってくれたら私は——」

「私は……なんだ？ 言ったよな。お前には隠しておきたいって。この言葉の意味通り、俺はお前にこの事を伝える気は無かった。もちろん、手伝ってもらおう気もこれっぽっちもない」

彼女は表情を歪め、ギリッと歯を噛み締めた。

視線は疑問を通り越して憎悪が見え隠れしている。

俺は視線を逸らし、ゆっくりと妹紅が居る方へと歩きだす。

「なん「なんで、か？基本誠実なお前なら分かるだろう。怨みや怒り、復讐は何も生まない。何も、と言うのは語弊かもしれない。訂正する。それらは時に集中力だって生む。だけどな。それと同時に周りが見渡せなくなる。物事に一直線になり過ぎて、逆に空回りする」……」

彼女が言い終わらぬうちに、その疑問に答えた。

「今回の仕事は侵入。そして搜索。誰にも感づかれないように動くこの仕事に、それは要らない」

無言で俯く射命丸にさらに追従する。
歩く足は止める事は無い。

「お前に伝えたのは失敗だった。はぐらかしておけばよかったって今更思うよ」

「……けどっ！だけど私はっ！！」
「いい加減気づけよっ！」

それでも。と声をあげた射命丸。
俺は足を止めて振り返り叫ぶ。

「何が憎しみだよ！？何が怒りだよっ！？俺がそんなこと知ってる訳無いじゃないか！？厨二病かよコンチクショーツ！俺が言いたいのはなっ！下手こいた時、お前をこの山から出したくないって事だけなんだよっ！！以上っ！！」
「……」

一気にまくし立ててしまった。息も荒い。

呆然とこちらを見る射命丸。

「……………あっ——／＼／＼／」

ハッと我に返る。

な、何を言ってるんだ俺っ!?

意味分かんないよ、あーっ!? もうっ!

「と、とにかくっ!! ぞ、そういう事だからっ! 来るなよ! 絶対来るなよな!」

そう叫びながら俺はその場から逃げるように足早に森の中に入ってしまった。

「……………なんで、連れてってくれない、のよっ」

射命丸はあの場所に立ち尽くしていた。訳も分からない事をまくし立てたまま走り去っていった上司に置いてきぼりにされた自分。

気づけば一人、愚痴を零していた。

呆れた。話さなかった事に対して、連れていかないと事に対して、どうでも良くなるくらいに。

言いたい事も言わせないで……なのに何故か私の言いたい事は分か
ってて。

そして何より、私の過去を知っていた。

怒りとか憎しみとか、言い方は無駄に気障きざうっぽい。だけど思い返せ
ば私の気持ちと似ていて妙で、言葉の端では私の過去を悲しんでく
れてたような気がした。気がただけで、それが本当か分からない
けど。

同情は要らない。何も知らない奴が分かるわけない。

……明日。もう一度頼もう。それで駄目だったら……無理矢理にで
も付いて行ってやる。

私はそう決意し、目を閉じ、息を吐く。

数分前まで叫んでいた自分が嘘のように、心も静けさを取り戻して
いる。

山から吹きおろす柔らかな風にあてられながら、私は朱く染まり始
めた秋の空に、黒い翼をはばたかせた。

少し強い風が吹いた後、俺は隠れていた木から広場に顔を覗かせた。

屋台の前に出された椅子に座っていた妹紅と目が合う。周りを見渡すが射命丸の姿はもちろん無い。彼女が飛び去った後なのか、僅かに紅く染まった葉が風に揺られ、ひらりひらりと揺られ揺られ、地面に落ちていく。

木陰から姿を表せて、俺は妹紅の座る隣に、一声をかけてから座った。

「……………」

「……………」

あんだだけの声量で叫んだんだ。かなり距離があるとは言え、彼女が座っていたこの場所にも間違はなく届いたであろう。

ちらり、と隣で息を吐く妹紅に視線を走らせる。

……上機嫌だ。なんでそんなに上機嫌なのか、分からない位に。

「瑠衣」

そんな中、上機嫌のままの彼女のソプラノボイスが聞こえた。

「…………なに？」

「瑠衣ってさ…………」

そこで彼女は口を閉じた。どうしたのか、と俺は首を捻る。

「やっぱり優しいんだね」

「え————っ！？う、う、五月蠅いやいっ／／／／」

パンツと屋台を叩き、勢いよく立ち上がる。

頬を緩め、軟らかな笑みを浮かべる妹紅に一気に恥ずかしくなって、俺は隠していた翼を広げ空へと翔にげだしたいた。

「……相変わらず、褒められるのは慣れないなあ」

自嘲気味に吐かれた瑠衣の言葉。それが夕焼けの空に静かに小さく響き渡るのだった。

慣れてないんだから仕様が無い（後書き）

どうも、たぬくです。

お読み頂きありがとうございました。

……勢いでなんかこうなった。まあ問題ない、はず。

とりあえず次回は調査の回……だと良いなあ。

ありがとうございました！

黒い鳥の鳴くところに（前書き）

サブタイトルはスルーでお願いします。
グロイ表現はありません。

黒い鳥の鳴くころに

小鳥達の囀りさえずり。それが朝日の差し込んだ小屋の中にも響く。
そんな部屋の中。瑠衣は腕を枕に目を開けたまま、木の年輪がくつきりと見える天井を見上げていた。

「なんであんな事言っただろうなあ」

独り呟く。

昨日の事。射命丸に注意——基押もとしし付けてしまった気持ち。それが今も恥ずかしい、訳ではない。

むしろ彼女に今日からの仕事について教えてしまった事に関してだ。俺は彼女に『伝える気は無かった』と言った。
しかし、どうしてか。

それを言ったのは俺が彼女に伝えてしまった後であった。

矛盾以外の何物でもない。

なんで伝えよう等と思ったのか。

思い出そうとしてみてもどうにも思い出せない。ほぼ無意識だったのだと思う。

案外、本心ではあいつに付いてきて欲しいなんて思っていたりして……

いや、無い無い。

思い当たった事に首を振り、考える事も尽きた、とベッドから起き上がる。

簡単な食事を頬張りながら家の扉を開ける。

「あ、おはようございます。今日も仕事日和ですよ」

「……………」

呆然と立ち尽くし、

ガチャ

そのまま開けた扉を閉めた。

どういう事だ？あれか？俺があいつの事考えてたから見えた幻覚か？

……これは酷いを通り越して末期症状だぞ？

そんな事はない。と首を振るが、それでは無いと判断するとあれは射命丸本人である、という事になる。いや、最初からそうだとは分かってたんだけど。現実逃避は必要だと思うんだ。

諦め、肩を落とし、もう一度扉を開いた。

「ウボッ!？」

「あ……………!」

開けた途端、目の前にあった黒いモノ。それ勢いよく顔に当たり俺の視界は暗転した。

「いや、出てこなかったんで、つい……」

「ついて……お前、もう少し穏便なやり方があっただろうが……」

「いや、すみません」

「謝って許されるなら警察はいらねえよう……」

俺は慣れ親しんだ自分のベッドに寝かされていた。どうやら射命丸が気絶した自分を運んでくれたらしい。今は身を起こし、近くにあった椅子に座っていた射命丸に怨念がましい視線を送っていた。

「警察？」等と首を傾げる射命丸。それを尻目に、俺はまだ赤く腫れた頬を^{さす}摩る。

扉を開けた時、目の前にあった黒いモノは射命丸の足だったらしい。らしい、というのは俺が視認したのは黒いモノだけだからである。本当に視界いっぱいには黒が広がっていたんだ。つまりは射命丸が扉を蹴破ろうと跳び蹴りをかました時に運良く（悪く）俺が扉を開け、彼女の蹴りは俺の顔にクリーンヒットした、と。

まあ、そういう事である。

「そもそも、せっかくあんだだけ忠告したんだぞ？来るか普通……？」

「え？忠告だったんですか？私には来てくれと頼まれた気がしたん

ですけど」

「……そうなのか？」

「はい！」

そもそも俺は来てくれ。等と言った覚えは無い。言っただとすれば……

『来るなよ！絶対来るなよな！』

……認めよう。それらしい事は言った。

ただの意味としてはそのまんまの意味だったんだよ。それは分かっ
て欲しかった。

「ですがすぐに目が覚めて良かったです」

「……まあ案外俺の体って丈夫だからな」

「あの大天狗の家に侵入するのが困難にならないで済みました」

「……心配するところはそこなのかよ」

心配されていると嬉しく思ったと思いきや、妙なオチを使われガッ
クリと肩を落とす。

上げて落とすとは……こいつ、出来るっ！？

兎に角、

「結局ついて来んのか？」

「え！？良いんですか？」

「ああ、なんて白々しい」

待ってました！とばかりに笑顔を咲かせて近づいて来る射命丸。お
れはそれから顔を逸らし、ボソリと呟いた。それが聞こえていたの

か射命丸は苦笑気味に笑う。

「さささ、行きましようか」

「俺さっき意識回復したばかりなんだけど？」

「行きましよう」

「……はい」

スタスタと足早に家の外へ出ていく射命丸を見送って、小さなため息を一つ。

そして、寝かされていたベッドから立ち上がる。

最近思う事がある。

彼女と数年行動を共にして来たが、彼女は精神面でかなり成熟しきっている気がする。

落ち着き払っているとか、そういう事では無くて、どうも感情の捌き口を知っているような。

現に今回がそうだ。

昨日はあれだけ露^{あらわ}にしていた感情は今では完全になりを潜めてしまっている。

それが精神の成熟に直結しているというのは少し短絡的過ぎるが、未だに顔を見ては恥ずかしくなってしまう俺から見ると、どうしても大人びて見えるのも仕方のない事だと思う。

大きく見せようと背伸びする上司^{おれ}と、妙に大人びた部^{しゃめいまる}下。

こうして考えると改めて不可解なものだ、と思い、もう一度。今度は大きなため息をついた。

時と場所は変わり、天狗の集落の一角。その中の山頂に最も近い位置に、俺達は降り立った。

そして、そこに慥然として建ててある建物を見上げた。

天狗達の家々をちょうど見渡せるように建てられているその家は巨大で……。

「いつ見ても偉そうですね」

「まあ実際偉いんだから仕方ないだろ。権力があると殆どの奴は少し慢心しちまう。その慢心の度合いによって部下から慕われるかそうでないか決まるんだよ」

一概にそうという訳じゃ無いけどな。と付け加え、大天狗の屋敷に視線を向け、集中する。

一、二、三、四、……十二。

12人か……。出払っているとはいえ、やっぱり多いな。

「どれくらい居ますか？」

「……今分かるだけでも12人。天魔が大天狗を呼び出したみたいだから、護衛に何人か付いていったみたいだけど、まだまだ多いな」
もちろん、楓が大天狗を呼び出したのは偶然なんかじゃない。むしろ、必然であると言える。

俺達は大天狗に付いていった精鋭達の妨害無しに行動出来て、楓は日々溜まった鬱憤を晴らす話を直接行える。まさに、一石二鳥である。

「瑠衣さんの能力、こういう所で便利ですよ。れえだあって言いましたか」

「リーダー、な」

リーダー

飛行機などに用いられている電磁波の跳ね返りによってそこに何かあるか、それとの距離が分かる。という機器である。

俺はそれを真似て、自らから電磁波を放散し、跳ね返ってきたものを受信し、自らを中心とした100平方メートル内にある対象物の位置を把握する。

まだ天狗の社会に入る前に偶然思い付いた（探し物などの面でのみ）使える能力の内の一つだ。

先程はこれを使い、天狗達の位置と数を特定した。
もちろん、数などの誤差はあるし、気休め程度で考えている。

「あの窓から入るぞ。ちょうど見回りの天狗が近くに居ない」

偶然開け放たれていた窓。俺達はそこから中へと入っていった。

カポーン

風呂場だ。

風呂場である。

風呂場なのだ。

そして射命丸からの視線が痛い。痛いったら痛い。

「射命丸、そんな目で見ないで欲しいんだけど」

「安心して下さい。いつもと同じ目で見てます」

「日頃から変態扱い!?!」

「あやや? 自覚があったと思ってたのですが、無かったのですか!?!」

「ぬおおおお!?!」

閑話休題

茶番劇はさておき、廊下へ繋がる扉を静かに開けて、首だけを出してまっすぐ、右、左、と視線を送り誰も居ない事を確認してから廊下に出る。

改めて、レーダーによる反応と視覚情報に異常が無いのを確認して、射命丸に出てくるように合図を送った。

先程とは打って変わって二人の表情に笑顔は無い。所謂『仕事の顔』である。

因みに、溜衣の背中に翼は見えない。生え変わりの季節であるのと、烏天狗の羽根と少し色が違う為、後々羽根が落ちていたりして面倒な事にならないように、と翼を隠したのである。

予め書斎の位置を調べていた溜衣が先導し、射命丸が後方を確認しながらそれに続く。

普段の射命丸が前で、溜衣が嫌々ながら後に続くいつもの光景を目の当たりにした後だと到底想像出来ない光景がそこにはあった。

息を潜め、音を立てる事を忍びながら先へ先へと進んでいく。

そして、見回りを避け、遭遇する事もなく、目的の書斎まで到着した。

誰も居ない事を確認してから、部屋の中に入る。

「ふう……」

射命丸も部屋に入って来たのを見て、扉を閉じ、常に張っていた警戒を僅かに緩め、体を解す^{ほぐ}。

「にしても上手く行き過ぎだな……」

「確かにそうかもしれませんが。とりあえず警戒するに越した事は無いでしょう」

一つ頷く。

「俺は警戒しておく。射命丸は当時の資料を」

コクリと頷き、射命丸は幾千もの書類が仕舞われた棚に向かっていった。

マルチタスクでも出来れば手伝えるんけどな……。

彼女の後ろ姿を見ながら、心の内でそんな事を呟く。

当時の資料を探しながら、周囲に電磁波を飛ばし、反応を確認する。そんなことをしたらどちらかが適当になってしまいうに違いない。

今度練習してみるか……。

時間ならかなりある。問題は才能。自分にそんな器用な真似が出来るようになるかどうかである。

まあ、やってみないと分からない為、この思考を振り払った。

「……………」

「……………」

沈黙。居心地の悪い沈黙ではない。

数だけがある資料に目を通していく射命丸を眺める。彼女がこちらに気づいたら侮蔑の目で見てくるに違いない。

それは嫌だ。と視界から彼女を外す。

この部屋に在るのは立ち並ぶ本棚の数々だけ。書斎というより図書室に近い気もする。

視界から外した射命丸が、また視界の端に現れ、ほっぼりだされるようにして置かれた椅子に座った。手には何枚かの和紙を束ねた資料。何か見つけたのだろうか。

彼女が居てくれたおかげで早めに作業を終わらせられる。

そう、彼女が居てくれたおかげで。

本当について来てくれて良かった。俺一人であつたなら、間違いく資料を探すだけでも多分な時間。そして、こんな事を考えてられる余裕すらも無かつたはずだ。

あんな大見えをきつた以上、些か恥ずかしくなってしまう自分が居る。

まあ、後で感謝の言葉を言え……たら良いなあ。

内心で素直になれない自分にため息をつき、書類を読み進める射命丸の近くまで歩いていく。

「何かあつたのか？」

ぶつきらばうに尋ねる。

「いえ。……あったというか、無かったというか」

どうもはつきりしない返答に首を傾げる。言っている彼女自身、どういう事か理解していないのか、表情からは動揺が見て取れる。

付いて来て下さい。と一声かけると、彼女はまたあの本棚の方へと足を向けた。

そんな彼女の後ろを俺はついて行く。

「これを見て下さい」

「これって探してる年の前の年の資料じゃないか」

「はい。次にその資料の右のものを見て欲しいんです」

言われた通り、右にあったものを手に取り開く。

「!？」

どういう事だ？

慌てて少し歩いた所にあった資料を手に取り、次にその右にある資料も引き抜く。

その二つの資料を広げ、見比べる。

『無い』のだ。空白が。

しかし、射命丸に見せられた年の資料には空白が『あった』

年月の空白が。

「おい、これって……」

「はい。大天狗^{あいつ}が面倒な事をしてくれたみたいです」

「おいおい、当時の資料だけ抜き取られてるのかよ……!!?」

二人が沈黙する書斎の中に、どこからか聞こえたカラスのふてぶてしい鳴き声が響くのだった。

黒い鳥の鳴くころに（後書き）

そんな訳で証拠？何それおいしいの？な回でした。

なんていうか、書きたいところまでいかなかった……。でもあまり文字数増やしたくなかったです。

どれくらいが丁度いいんでしょうか？

お読みいただきありがとうございました！

白黒はつきり？（前書き）

題名についてですが、某閻魔様は関係ありません。ご了承ください

白黒はつきり？

「……………」

「……………」

気まずい空気が流れる。

やる事も分からず、呆然と立ち尽くす。

いや、やる事ならある。

他の資料を探す事だ。

しかし、それらは先程のように年別に置かれたものではなく、転々と置かれている可能性が高い。更に言えば、先程の資料が抜き取られていたのなら他の資料も無くなっている可能性もある。むしろ、絶対そうだ。

八方塞がり、である。

いや、待てよ……。これって物的証拠とは言わずも、意図的に証拠を隠滅したとなれば揺さ振るには使えるんじゃないか？

発想の逆転だった。

そして、思考は転逆する。

ああ、そうか。そういう事か……

「フフッ。そうだと射命丸、少し頼みたい事があるんだ」

射命丸の表情を見るにこの時の俺はかなり狡猾な笑みを浮かべていたらしい。

「まったくあの人は何を考えてるのかしらね……」

少し時間は進み、ある家の扉の前で射命丸の呆れたような声が響いた。あの後、瑠衣の先導に従い一人だけ屋敷の外に出てきたのだ。無論、瑠衣の独断で。

フウツと息をつき、目の前の扉を見据え、

「スウ〜っ、ハア」

大きく深呼吸をした。

息を吐いた後の彼女の顔は真剣そのもので、先程呆れかえった声を出していたとは思えない程。
しかし、どこか不安げであり、悲しげでもある。

「すみませんっ！」

余程緊張しているのか、裏返ったような声が彼女の口から放たれた。

どうしようもできない沈黙の後、扉の奥から何かが動く音がする。そして扉は開かれた。

「どなたですか？」

家の中から出てきたのは、年端のいかないうような白狼天狗の少年であつた。

少年は私を見て少し驚いたように三度目を開閉させてからそう尋ねてきた。

期待はずれ。いや、自分にとっては運が良かったのか。予想していた人物とは違う人物の登場にホッと息をつく。黙ってしまった自分を不思議そうに見上げている少年にどことなく不安を取り除かれた。そんな感覚を覚えた。

「お母さんとお父さんはいるかしら？」

「えっと、新聞の勧誘はいらないです」

「えっ？」

聞きなれない単語に思わず首をかしげる。

新聞……って何かしら？

生まれつきの好奇心がうずくが、今は聞くべきではない。

「安心して。その…新聞？を勧誘しに来たわけじゃないの。あなたのお父さんとお母さんに少しお話がしたいだけ。呼んできてもらえる？」

「……分かりました」

少し考えるように間をおいてから頷くと、少年の種族である白狼天狗の特徴とも言える白い尻尾を忙しなく振って家の奥へと入っていた。

この天狗の山で白狼天狗の立場は烏天狗よりも下である。そうであるにも関わらず、この家は射命丸の家の倍はあるぐらいの大きさだった。

それだけでも、この家の主が天狗の山の中でどのような立場にいるのかは明白だろう。

まだ名も知らぬ少年が家の中に消えていくのを見送って、射命丸は僅かに笑みを浮かべる。

ここから。そう、ここからなのだ。

頼まれた事くらい、ちゃんとやり遂げないとね。

場所は移り大天狗の家の書斎。

「さて、どんなことになるのかな」

そんな呟きが人の来ないような薄暗い書斎の隅から聞こえた。その声の持ち主——瑠衣は口元をわずかに歪め、書斎に置いてあるも

のを抜き出したのか、いくつかの書類を読み進めている。その表情は真剣に読んでいるとは言えず、ただ流し読みをしているだけのようにも見える。

何かをするわけでも何かを待っている風でもない。ただ座って書類を眺めているだけ。そう表現するのが妥当ともいえる。

「ん？」

そんな中、瑠衣の耳に扉をあけられた音が入ってきた。

人は来ないであろうが、反射的にだらけきっていた姿勢をただしいつでも動けるように身をかがめる。

まあそれは杞憂に終わった。数分間足音がしたと思えばまた扉のあけられた音がした。

どうやら、出て行ったらしい。

念のために誰もいないことを確認してから、数刻前に射命丸が見つけた年代別の事柄が書かれた書類がある棚に向かう。

「良かった。やっぱり無い。まあ、ここに置かれるとしたら大天狗が戻ってきてから……戻ってきてから数刻してもまだこの棚に当時の書類が置かれなかったら——」

フツ、と似合わない狡猾な笑みを浮かべてからまた書斎の暗がりに消えていった。

「大天狗が来るまで暇つぶしでも出来ればいいんだけど……」

そしてさらに時間は進む。

「瑠衣さん。瑠衣さんの予想通りやっぱりあったみたいですよ、つてどうしたんですかこの書類の束は……!?!?」

二人は瑠衣の家で合流していた。出て行った時はまだ天高くあった太陽も今では西の空を赤く照らしている。

射命丸が瑠衣に頼まれたことを終え瑠衣の元に来ると彼の部屋には文字でびっしり埋め尽くされた書類が彼の座る椅子と机を中心に所狭しと散乱していた。

「あ、射命丸か。お帰り」

「お帰りって……まあ良いです。それよりこの書類はいつたい?」

「ああ、それ?それは文字の練習だよ。どうせ射命丸に調べてもらったものは無かっただろ?」

瑠衣の視線が部屋の前で書類の散乱する床に足を踏み入れるべきか躊躇う射命丸に向けられる。

瑠衣が言った“無かった”は射命丸が最初彼に告げた“あった”とはまた違う意味を持つことを理解してから、射命丸は頷く。

「そっか。なら仕方ない。いや、この場合そうであって苦労が無駄にならなかったから良かったとも言えるべきか」

「ああ。そのための『文字の練習』だったんですか……。てっきり

ついに頭がおかしくなってしまったのかと。」

「折角やる気出したってのにな……酷いなあ」

「はいはい、私が悪かったですよ（笑）」

「感情が全然籠ってない!？」

肩をすくめやれやれと溜息をつく射命丸にウガーッと噛みつく溜衣。
上司の威厳もへったくれもない。

「それより溜衣さんのほうはどうだったんですか？」

「あれ、俺に人権……天狗権? っていないのかな? ……はあ、俺の方も予想通りだったよ」

「そうですか……。それじゃあ……」

「ああ、明日の犬天狗の反応によって……かな。何十年も前の事を掘り出したんだ。当然証拠なんかも少なくなる。必然的に証言から証拠を見つけたなきゃいけない。……まさかゲームでやったことのあるような法廷の舞台に馬鹿だった俺が立つなんてね」

最後にボソリと何か呟いた。という事だけしかわからなかった射命丸は言及しようと口を僅かに開き、どうせ教えてくれないだろうな、と目の前に座る人物の事を考えなおしてから口を閉じる。

「とりあえず内容は聞いてきたのでここに置いておきますね」

「おお。言っておいて無かったから少し心配してたんだよ。助かる。それじゃあ射命丸は上がって良いよ。後は俺がやるからさ」

「いえ、溜衣さんがさぼるかもしれないので終わるまで居ます」

「ゲッ……手厳しい」

厳格にそう告げる射命丸であったが、その横顔はどこか嬉しそうであった。

「ただいま……」

翌朝、射命丸は家に帰宅した。所謂朝帰りである。朝帰りと言うと、昼ドラなんかであるアレを想像しがちであるが彼女の場合は違った。仕事が終わらず会社に寝泊まりしていた。というのに近い。尤も上司の仕事がではあるが。

もちろん、彼女が寝ている間、上司は手は出さなかっただろうし、そんな勇氣もないであろう。

上司を椅子に括りつけて寝顔が見られないようにベッドの端を板で覆って寝たからという絶対的理由もある。

昨日訪れた大天狗の家や権力の高い白狼天狗の家などには劣るもののなお広い。そんな家に彼女の声がこだまする。もちろん、彼女の声に応える者は居ない。

それを気にする事無く彼女は子供の時から使っていた部屋へと向かう。

年頃の女性にしてはかなり質素な部屋。それが彼女の部屋であった。見当たるものと言えば仕事をするために両親の部屋から拝借した洒落っ気のある机と椅子。母の編んだ奇抜的な服の数々、それもほぼ同じデザインの服の入った箆^{たんす}。そしてこれまた母が編んで作ったぬいぐるみの数々。

彼女は着ていた服と筆筒に入れてあった服とを着替え、脱いだ服をそれ用の籠に入れていく。

そして小さくあくびをすると、ぬいぐるみに視線を向けた。

彼女が少女趣味だというわけではない。止まっているのだ。子供の時から、時間が止まっていたのだ。天魔から彼の話を聞いて、彼と会って話すまでは……。

「……今までずっと泣いててごめんなさい。でも今日、ちゃんとお母様達の敵……うんう。今までの自分に白黒はつきりつけてきますから。だから——」

射命丸は口をつぐんだ。

許してください。なんて駄目よね……。

「それじゃあ、いってきます——」

白黒はつきり？（後書き）

とりあえず次回の伏線回。

まさか三話も使うとは予想だにしてなかった（汗

途中で出てきた『ゲーム』は逆転裁〇〇ですね。
最近何故かはまり出してしまった（笑）

それじゃ、また次回に。

天狗裁判（仮）

「……ね、眠い」

時刻は辰の刻。まだ太陽が昇りきらない頃。

眠い目を擦りながら、トボトボと山の頂上——天魔の家の方へと歩いていく一人の少年の姿があった。

黒い髪、紅い瞳。黒とは言えないものの茶色の羽が所々混ざりながらも依然として自身の象徴だと周囲に見せ付ける翼。

ライチョウの妖怪である溜衣である。

翼があるんだから飛べば良いじゃないかって？

それは無理、と一言で答えさせてもらう。

飛んだら間違いなく地面へ突っ込む。

瞼が重くて重くて。

歩くのもやっとなんだから。

元はと言えば射命丸のせいだ。

あいつ、自分が寝るからってわざわざ布で椅子に括りつけやがって……。

御蔭で一睡もできなかったじゃないか。

なに、寝ようとはしたんだ。だけど、生憎アレが完成してなかったんだから寝れる訳無いじゃないか。

……訂正する。三分の一は俺のせいだ。

「はあゝ……」

大きな溜息をつく。

目の前には見上げても平地が見えないようなかなり長い急な傾斜。

新手の嫌がらせか、これ？

だいたい60度はあろう傾斜を半開きの目でジッと眺め、肩を落とし、また眺めては肩を落とす。その繰り返し。

なんで山を登るか？

そこに山があるからさ（キリッ

……なんて言ってみたかったなあ。

とてもじゃないけど、俺には傾斜の先に理想郷アガルタは見えないよ。むしろ見えるのは地獄だ。

「はあゝ……」

また大きな溜息をつき、近くに転がっていた木の枝を杖にして、渋々と永遠に続くかのような傾斜を登っていった。

「天魔様。射命丸、瑠衣の二名です。入室してもよろしいでしょうか」

あの後、永遠に続くかのような坂を登りきった俺を待っていたのは射命丸の『時間くらい守って下さい』の一言だった。怒りを抑えた俺を褒めてほしい。上司としてガツンと言ってやりたかったが、体力が尽きそうだったのでパス。

射命丸が『お疲れ様です』なんて言ってくれていれば、そこが理想^{アガ}郷^{ルダ}に見えたかもしれないのに。

現実是非情だ。

そして歩みの遅い俺を引きずる形で射命丸は天魔の部屋まで至ったのだった。

前回と同様にガサガサと部屋の中から音が聞こえた後、『入りなさい』と声がかかる。

思うんだが、あいつ寝てたんじゃないかと思うんだよね。いつも着

物がはだけてるし。まあ、眼福なんだけど。

「失礼します」と凜々しい声で答えてから部屋に入っていく射命丸に続く。

部屋の中はほとんど前に来た時と同じくらい。変わったとしたら床に散らばる和紙の量が少なくなったくらいか。

「射命丸文、お召し通り参上いたしました」
「……瑠衣。以下同文」

豪快な省略っぷりに苦笑いすり楓。
不満げにこちらを睨む射命丸。

「あなた随分と眠そうね。何かあったのかな？」
「射命丸が寝かせてくれなかった」
「……え（へ）！？」

楓の視線が射命丸に向き、射命丸の視線は瑠衣に向く。

「あらら、そんなところ」ま、待ってください！瑠衣さん早く訂正をっ！」……ふふふ」

一時の沈黙の後、射命丸は瑠衣の襟につかみ掛かり強引に揺する。
しかし、

「文ちゃん無駄よ。もう寝てるわ」

肝心の瑠衣は瞼を閉じて静かに寝息をたてていた。
睡魔に負ける前に、射命丸に一矢報いる事が出来たためか、はたまた

た、ただ良い夢を見ているだけなのか。どちらかは分からないがその顔は僅かに笑みを作っていた。

「起きてくださああい！」

弁解するために必死に瑠衣の襟を揺する射命丸。

しかし、瑠衣はと言うと起こそうとする射命丸の意思とは裏腹に、違う意味の眠り——気絶することになった。

しかしまあ、瑠衣は『嘘』は言っていないのである。

「さ、文ちゃん。詳しくお話聞かせて貰おうカナ？」

「ち、違うんですよ！これはこの人が私を嵌めた罠です！！信じてください！」

「信じるか決めるのも話を聞いてからよね」

「~~~~っ！！」

「あ、起きたみたいね」

「……………」

声が聞こえた。閉じていた瞼を僅かに開ける。

「おはよう」

「……………」

「お、おはよう……」

横になっていた上半身を起こすと、いつも通りの笑顔を見せる楓とやけに不機嫌な射命丸の姿があった。

とりあえず自分に普通に対応してくれそうな楓に声をかける。

「どのくらい寝てた……？」

「一刻くらいかしら。大丈夫よ、まだ大天狗は来てないから」

次に尋ねようとしていた質問の答えを先に返され、安堵の息を吐く。

予め準備などの為はかなり早く集合していた事が吉と出た。もちろん、準備には時間が押すことになるだろうが、既に本番が始まっている事の方が大変だ。

「それじゃあ、射命丸が怒ってんのは準備を任せっきりだったからか」

納得の言葉を呟いて頷く。

今回のに関しては、真面目にやろうと決めてるんだし、寝ててやれなかった所を挽回した後ちゃんと射命丸には謝らないと。

「……そうね。そんな感じよ♪」

知りながらも面白い物見たさで楓は瑠衣にそう告げた。

楓の表情が不自然な笑顔だと気付いた瑠衣は僅かに顔を歪めながらも、小さく頷く。

楓の笑顔の裏に何かある。とは分かったもののその『何か』が何なのかはわかるはずもない。

「それじゃ大天狗が来るまでどのくらいあるんだ？」

「そうね、あと一刻ちよつとくらいかしら……？ 私も文ちゃんを手伝ってあげたから、そこまで焦ることは無いわよ」

「……楓も手伝ってくれたのか。悪いな」

そういえば、と部屋の中を見渡し有るはずのない時計を探してそう楓に問うた。癖、というか、人間であった我がいるため、瑠衣はたまに未来の環境があつてこそその行動を取る。

その行動がこの時代では限りなく異常で有ることは言うまでもない事であろう。

それを気にした様子もなく、楓は彼の問いに答える。会って間もない頃は気になってはいたものの、今では慣れっこである。

いつの間にか、瑠衣の行動に対しておかしく感じる事は無くなっていた。

早速、瑠衣はまだ手の掛かっていない準備——もしくは、台本合わせと言えるだろうか。に取り掛かり、依然として不機嫌な射命丸に一言告げると、あれこれと指示しはじめた。

「まったく、敏感なんだか鈍感なんだか……」

そんな楓の言葉は誰に聞かれるまでもなく消えていくのだった。

扉の先から厳格な声が部屋の中に響いた。

いやがおうでも部屋の中に居たもの達の顔は引き締まる。

「入りなさい」

扉の先に聞こえるよう、それなりに響くような楓の声。

そこにはいつも見られるような彼女のふてぶてしさはない。

むしろ、後ろめたいような感情を吐露してしまいそうな圧力プレッシャーがそこには込められていた。

そして、声が響くと何秒か遅れて扉が開く。

見た目、30代後半の厳肅とした男の烏天狗。

それがこの時、初めて大天狗を見た瑠衣の感想であった。

大天狗は瑠衣達を見る事も無く、部屋の中央に立ち止まり、一礼をした。

「天魔様、大天狗様。お召し通り参上いたしました」

威張りくさっているような、そんな印象であったが、天魔の前だからだろうか。礼儀の出来る優秀な天狗。というような立ち振る舞いを見せた。

「ええ。昨日に引き続き悪いわね」

そんな建前のような楓の言葉に大天狗は「いえ、構いません」と首を振った。

そして、天魔様に呼び出されるとはくくくく社交辞令を始める始末。

「あら、そう。今回はあなたに任せている領地の件で少し話を聞きたくて呼び出したの」

いい加減鬱陶しくなったのか、楓は無理矢理大天狗の言葉を切り、いきなり主題を切り出した。

言葉を切られた大天狗は嫌な顔一つせず、視線を右に動かした。

「なるほど。それで彼女がいるのですね？」

大天狗の横。それも右側には射命丸が立っていた。

「そうよ。貴方には彼女と貴方の左に居る瑠衣からの質問に答えてもらうわ。良いかしら？」

射命丸に向けていた視線を今度は瑠衣に向け、大天狗は視線を前に居る楓に戻し、そして頷いた。

そして天狗裁判（仮）が始まった。

裁判。人が人を有罪か無罪かに分けるもの。ローマで始めて行われたものが起源とされており、それが世界に広がっていったらしい。その裁判がどうしてか、この天狗の山で行われていた。

真ん中に被告人。その右に検察官。左に検察官。前に裁判官。

ぶっちゃけ四面楚歌。あるいはリンチというこの状況で公正な裁判が出来ようか。いや、出来ない。

ここへきて少し大天狗が可哀相に思えてきたのは何故だろう。

「えっと、櫂様。引き続き証言を……」

普通、こういう進行は裁判長がやるものだ。ちゃんと事前に俺はそれを楓には伝えてあったはずだ。

なのに……

「異議ありよ。貴方は何故当時の書類を隠したのかしら……? その意味を説明してくれる?」

なんで楓が尋問をしているのだろう?

なんかもう、俺と射命丸。そして大天狗はポカーンと顔を見合わせるしかなかった。

始まりは、

「始めに先日無断で櫛様の家に入ったのが、今回の調査の為であった事を御理解下さい」

そう射命丸がつらつらと告げる。打ち合わせ通りの言葉である。僅かに顔をしかめた後、惘然とした表情に戻して大天狗は頷いた。

「では質問を。まずは貴方の家の書斎。先日調べたところ、ある年の書類が欠けていました。それについて詳しくお聞かせいただきたい」

敬意なんか籠ってるはずもない敬語を間に入れながら簡潔に宣告する。

「それなら隠しておいたのだ。無粋な鼠が盗んでいかんようにな」

気障ったらしくそう皮肉を込めて告げる大天狗に俺は笑みを浮かべた。

なんだ、簡単じゃないか。

なんて。

冷静に大天狗が言った言葉は矛盾ばかり。

案外、簡単に終わりそうだ。と口を開いた時だった。

「待ちなさい」

俺の声でも、射命丸の声でもない。響いたのは楓の声であった。

「なぜ、その年の書類だけが盗まれると思ったの？ そのところ、詳しく聞かせてくれる？」

射命丸と顔を見合わせる。何これ？ どういう事？

そんな声が聞こえて来るような動揺と焦りが入った目でこちらを睨んで来る。

いや、俺も訳が分からないんだよ！

全力で叫んでやりたい。

どうしてこうなった！？

「瑠衣、次の質問に移って」

「あ、はい」

気付けば大天狗は俯いたまま、見事に本当の事——自らの意思で書類を燃やした事を証言した。

わざわざ書斎で数刻の時間を過ごし、書斎に当時の書類が無いのは意図的な理由であるという事を確認して、笑みを浮かべていた自分が馬鹿らしくなってくる。

「次、というか最後なのですが、天魔様これを」

ガサゴソと懷から一枚の和紙を取り出す。

堅苦しそうな文字が書き連ねられたその内容を知っているのは、俺、射命丸、楓、犬走の白狼天狗。そして、今日の前に居る大天狗。

「えー、なにになに？」

ふざけたような、楓の声が部屋の中に響く。

「此度、貴殿に彼の家の者の排除を願いたく、この書状を送らせて頂いた。……………」

そこに書かれている文が読み上げられていくと、大天狗の顔は天狗らしからぬ青に変わっていった。

「贈り主の名は書いてありませんでしたが、この文の筆跡が大天狗様の筆跡に酷似しています。大天狗様本人が書いたと言ってもほぼ間違いはないでしょう」

ようやく、といった表情でやっとの出番に凜とした声を張る射命丸。そしてその証拠に書斎にあった書類の一つ——大天狗が書いたで

あろう——を楓に手渡す。

「櫂、貴方これはどういう事なの？」

凍てついた視線を大天狗に向ける楓の声に、俺までもが体を震わせた。

そして、大天狗は恐怖に怯えた表情で叫んだ。

「ま、待て！！ 違う！ それは私が書いたものじゃない！ それはちゃんと燃やして……」

「あら、燃やしたの？」

そう告げる楓の顔は素晴らしい笑顔であった。

あの表情が自分に向けられたらと思うと……あー、怖い。怖い。

そう。あの手紙は偽物なのだ。本物はきっと大天狗の言う通り書類と一緒に燃やしてしまったのだろう。

あれは俺が偽造したもの。昨日、射命丸が帰ってくるまでしていた『次の練習』も今楓が握っている書類の筆跡を俺が真似る練習を行っていただけ。

そして同時に射命丸は大天狗から手紙が出されたであろう有力な白狼天狗を中心に、手紙の内容を頭を下げてまで聞いてきていたのだ。その字と情報をまとめたのがあの手紙。

上手く行き過ぎた気もする。

元々は大天狗の証言に揺さぶりをかけ、頭に血がのぼってきたところであの手紙をちらかせる予定であった。そうすれば、意識するより先に本当の言葉が出るのでは無いか？ と。

故に大天狗の反応次第では俺達は無意味に大天狗を起訴したことになるってはずなのだ。

しかし、どうしてか楓は大天狗を意気消沈させる事でそれを成功させた。

本当にこんな方法で目の前の大天狗を罪だというのか。そう言われてしまえば俺は、沈黙するだけだ。

未来の法廷でこんな偽造した証拠など受理されることはないだろう。分かっていた。これが本来あってはいけないことだとは、もうとつくに気づいていたのだ。

それでも俺は大天狗に罪を認めさせることの躍起になっていたんだ。書斎で今回のことを考え付いた時はそんなのでいいのかと否定する自分を隠すようにわざと笑って見せた。否定する自分が怖かったんだ。ただ自分のしていることを認めない自分が嫌で嫌でしょうがなかったんだ。今でもやったことが良かったのかと不安で不安でしうがない。だけど、それでも……

「天魔、貴様嵌めたのか!？」

敬意の無い敬語さえも忘れてギャーギャー喚く大天狗の声に、楓は肩を竦めてみせる。

それに怒り浸透した大天狗は、大きく翼を広げ楓へと駆け出した。

「アアアアア！」

大天狗は脇に刺した剣を引き抜き、その剣は――

射命丸の剣に阻まれていた。

彼女は天狗最速の少女。あれだけの時間あれば、冷静さを欠かした大天狗の剣など簡単に受け止めてしまう。

彼女がいたから楓は動こうとしなかったし、俺も楓を助けようとはしなかった。

そして俺は隙だらけの大天狗の背後に立つ。

「欒様……あー、敬語は良いや。——大天狗の目の前にいる射命丸はここの天狗の中で最速。その肩書きに畏れてアンタはそいつを天狗達から孤立させたんだ。

当然、それが本当だって分かってるアンタなら、逃げ出すなんて野暮な真似はしないよな？」

「貴方にはイロイロとしてやられました。今、ここで殺してやりたい。ですが、それをしてしまうと私も犯罪者。貴方と同じなんてへどが出ます」

「そうね。貴方には文ちゃんの両親。そして、気に喰わないからと無意味に職を切られた天狗達に頭を下げてから、罪を償ってもらいましょう」

目を見開いたまま、大天狗は静かに膝をついた。

太陽の沈む西の刻。

いつもなら聞こえているであろう鳥の鳴き声はまったくなく、地上はその鳴き声を聞く事なく夜を迎えるのだった。

天狗裁判（仮）（後書き）

どうも、たぬくです m（　） m

今回、伏線の回集回。ということで書いたのですが上手く書けた自信がないです。はい。

ここ分かりづらい！！

なんてことがありましたら感想で指摘していただくと嬉しいです。

次回は今回の次の日のお話。少し早めに投稿できそうなので多分な期待はせず、気長に待って↑ゑ？いただけると幸いです。

ではまた（\$・・・）／~~~~

一仕事後のそんな話。(前書き)

前回の後書きで早めといったものの、あれからなかなか時間がとれずこんな時間になってしまいました。
まあ、一日早いのでご勘弁を。

一仕事後のそんな話。

「……………」

なんで、なんだろう。

なんだって、こんな……

「あ、溜衣。やっと来たみたいね！文ちゃん案内ありがとう」

なんでこんな宴会の準備がしてあるんだ！？

突然家に押しかけてきた射命丸に言われるがまま、天魔の部屋に来了。しかし、そこにあるのは机に置かれた酒。料理。酒。料理。酒。料理。酒。料理。

「おい、楓！？聞いてないよ、こんなの！」

「あら、文に伝えておいてって言ったんだけど」

「……（プイツ）」

「言わなかったみたいね」

視線を向けると顔を逸らした射命丸に苦笑を浮かべながら楓はさあ

さあと会場——天魔の部屋の中心に来るように促した。
それに応じて、歩いていく。

「ん？ 射命丸は出席しないのか？」

誰も後ろについて来て居ない事に気付き、振り返るとそこには当然おらず、先程彼女が居たところにも彼女の影は無くなっていた。
辺りを見渡してもこの部屋には楓と自分しか居ない。

「文ならもう一人を呼びに行ったわ。ちゃんと出席するから安心しなさい」

「ん。そうか。なら……って別に俺が安心する要素は無いはずだぞ」

「ふーん」

「な、なんだよそれ?!」

「なんでもないわ」

「ぐぬぬ……」

これ以上問い詰めても、『しつこい男は嫌われるわよ』の一点張りで跳ね返されるのは目に見えてる。

下手にからかわれるネタを増やさないように、口を閉じておく方が利口な判断だろう。

「そういえばなんで昨日はお前が尋問したんだよ。お前は黙って見てれば良いって何回も言っただろうに」

「フツッ 私も言ったわよ。ちゃんと瑠衣が忠告して来る前にね」
「……………」

はて、俺は何か言われたっけかな？

「忘れたの？ 言ったじゃない。仕事内容は『大天狗の弱みを一つ

握ってくることに。それに付け込めば当時の証拠なんかもゲロツてくれるでしょ』ってね。弱みを握って来てくれれば私がなんとかする。って意味だったんだけど、伝わって無かったのかな？」

伝わって無かったのです。だいたいそんな遠回しな言葉で意味が通じると思ってる奴なんかいるのかな、普通。

「ここにいますわよ」

はいはい。分かった分かった。って

「……心を読むなよ」

呆れて溜息も出ない。

楓は口元を隠して上品に笑う。

「もう来たみたいね」

ふと、楓が扉の方へと振り返った。

流石射命丸。仕事が早い。

「早いな。そういえば、もう一人って誰なんだ？知らない天狗なんかだったら、俺は早々に退席するぞ？」

「気が早いわよ。もう来るんだから少しくらい待ちなっ」

怪訝そうに頬を赤く染め膨らませたのを見るに、どうやら会って俺の非になる人物ではないらしい。

「少しは悪びれた顔をしてよね」

「はいはい、悪かったですよ（笑）」
「はあ……」

閑話休題

そんな漫才をやって、数秒遅れてから数百年の歳月が経過してもまだ真新しい輝きを放つ木の扉が開いた。

当然、俺と楓の視線もそちらに向く。

「失礼します……」

開いた扉の隙間から特徴のある白い髪と、彼女の種族としては珍しい紅い瞳が見えた。同時にその瞳と視線が合う。

「妹紅……?」

楓が言っていたもう一人。それは、不老不死の少女。藤原妹紅その人であった。

「驚いたよ。もう一人来るって聞いてたけどまさか妹紅が来るなんてさ」

「うん。三日前に瑠衣に次に会う日を聞いてなかった事に気づいて、昨日またあの広場に居たんだけど……」

あ、そういえば言ってなかったっけ……（汗
あの時は恥ずかしくて。

「ご、ごめん。逃げ帰ってまた戻るのは恥ずかしいからって後回しにしてたら……」

「大丈夫よ。ちゃんと今日も会えたんだから」

「（も、妹紅さんマジ天使っ！！）」

全力で叫んでやりたかった。

「瑠衣？」

「あ、何でもないよ。うん」

「？」

不思議そうに首を傾げた妹紅の視線から逃れようと、机に乘せられた料理を口に運ぶ。

今回の宴会は楓が言った通り、出席者がたったの四人。人数がそれだけしか居ない原因の一つでもある俺が言うのはかなり不謹慎であるが、やはりかなり少ない。

その為か、食事や酒を食べ飲みし始めるタイミングは個人の自由となっていた。

あちらでは楓と射命丸が

「文、今日は無礼講だから敬語は無しよ」

「で、ですが一天狗である私が天魔様の真名をお呼びするのは……」

「あら、私は文と親しくなったと思ってただけ、文は違うの？」

「そ、それは、その……。卑怯ですよ、天魔様」

といった会話を何度も繰り返しながらも、彼女達の近くに置いてあった酒の樽をどんと空にしていく。

「そういえばさっきの続きだけど、妹紅は楓とはいっ会ったんだ」

「あー、えっとさっき言った通り私はあの広場で溜衣が来ないかこの山を眺めてたんだ」

もちろん、来てくれたら良いなっていう願望に近かったけどね。と妹紅はフォローを入れて、息をつく。

こんな小さなフォローでも、なんとなく心が落ち着くような気がした。

気まぐれに口に入れた料理をよく噛んでから飲み込み、先程の俺が途切れさせてしまった話を促すと、妹紅は僅かに頬を緩めて、嬉しそうに笑顔を浮かべて話してくれた。

「その時後ろから声をかけてきたのが楓だったの。それで警戒も中々に話してたらいつの間にか来ることになってたんだ」

あー、なるほど。

妹紅も楓の空気に吞まれたか。

しかし天魔が勝手に山を飛び出してって良いのかね？

「文とは迎えに来て貰った時に少しお話をしたらすぐに意気投合出来て、仲良くなれたんだ」

続いて話された言葉に俺は衝撃を受けた。

な、名前で呼んでる！？

……今更になって思うんだけど二度目の生を与えられて年上の俺より、妹紅の方が社交性が高いように感じるんだけど、気のせいだね？
ね？

「へ、へえ」

……分かってるさ。俺が人間関係が上手くいかない事くらい。

「うん、飲もう。そうしよう。妹紅、酒飲めるよな？」

「まあ人並みなら……」

最早、やけ酒である。

うっし、飲もうか！

数十分後……

「うーん……」

可愛らしい声を漏らしながら、机に俯せになる妹紅の姿があった。

「水持って来たぞ？　自分で飲めるか？」

瑠衣の問い掛けに小さく頷いて、木の器を受け取り、なるべく動か

ないようにその中に注がれた水を口に含む。
一言で言えば彼女は酔っ払ったのである。

彼女自身が言ったように彼女は不老不死の薬を飲んでから人並み、
いやそれ以上の量の酒は飲める。

しかし、それは『人間の』お酒のお話。

基本、人間より酒に強い天狗達だからこそ、天狗のお酒は人間のものより遥かに強いのである。

その為、彼女はたったの数十分の間に限界を超えるアルコールを摂取し、こうして酔い潰れてしまったのだ。

「楓っ！ 布団か何か無いか？ 妹紅を寝かせてあげたいんだ」

「あらあら、若いって良いわね」

「お前は盛大に勘違いをしているっ！！」

絶対にそんな事はしない！ だから射命丸。そんな獣けだものを見るような
目で見ないでっ！？

「冗談よ、冗談。やっぱり人間のお酒も取り寄せておけば良かったかしら？」

「まあ、今度はそうすれば良いだろ。……それで寝かせられる所は
――」

「説明しても分からないわ。自慢じゃないけどこの家無駄に広いの
よね」

言外に自分が行くと告げて、俺がおんぶしていた妹紅を抱き抱えて
から楓は部屋の外へと出ていった。

「……………」

「……………」

気まずい。気まずい。いたら気まずい。

俺と射命丸。この部屋には二人だけしかない。普段でさえ意識すれば気にしてしまうような空間であるというのに、今回はさらに酷かった。

何しろ、射命丸の機嫌が悪いのだ。俺相手の時限定で。

まあ理由は分かっている。

先日の前準備を手伝わなかった事だと思う。

自分が仕事しているというのに、上司は夢の中で遊んでいるなんて不愉快極まりない事だろう。

よし！

「あのさ……」

「……………」

意を決して話しかけるも戻ってきたのはただの沈黙だけ。

むう、と小さく唸りをあげてから続ける。

「えっとさ、射命丸。昨日の事なんだけど」

「……………」

先程と同じく答えはない。しかし、唯一違うとすれば彼女の目がこちらを向いてた事だけであろう。

スー、ハー。

大きく深呼吸。そして口を開く。

「昨日の準備の時は寝ちゃっててゴメン!!」
「?.....」

手と手を合わせて拝むようにお願いする。

続く沈黙に耐え切れず、閉じていた瞼まぶたを開き彼女を仰いでみれば、
彼女は驚いたような呆れたような、言葉では簡単に言い表せないような表情でこちらを見ていた。

「.....?」
「.....フフッ。フフフ。そうですね。瑠衣さんはそういう天狗でした」

一時の沈黙の後、射命丸はなにが面白いのか腹を抱えて笑い始めた。

「えっと、射命丸?」

「.....文あやです」

「は?」

「文で良いです」

「いや、え? どういう事だかさっぱり分からないんだけど」

「ですから、名前で呼んで下さいと言っているんですよ」

クスクスと笑う声を潜めて、顔を上げた射命丸と視線が合う。
なんだか恥ずかしい。妹紅の時とは違う。

何て言うか、これって.....青春、だったり?

「あ、あY「妹紅ちゃんは布団に入ったらすぐ寝ちゃったわよ」」

……………」

その時、扉は開いた。

「あ、ごめんなさい。私は妹紅ちゃんの所に行くからどうぞ続けて」

「続けられるかっ！！　　って待て！　逃げな！　おい話を聞けて！　文、捕まえて！」

「はいっ！」

「はあ。だから文には名前を呼べって言われただけなんだって」

「なんだあ。それならそうと言ってよね」

「何度も言ったと覚えがあるんだが……」

俺と楓が居る天魔の部屋に射命——文の姿は無い。彼女には俺が楓に説明している間、妹紅についてもらっている。

もちろん、恥ずかしかった訳じゃない。

「それにしても顔が赤くなってたけどね」

「そ、それは……！」

「それは？」

「……その通りですー。少し文を違う目で見てました。すいませんでしたー！（棒）」

自慢げにこちらを見てくる楓の視線に耐えられず、俺は顔を明後日の方向に逸らした。

そんな溜衣にクスリと笑みを浮かべた楓は手元にあった酒を口に流し込む。

「ふーん。つまり……？」

「つ、つまり……って、能力使うなよ！」

危ない危ない。危うく言いそうになった。

いつの間にか完全に楓のペースである。むしろ、いつが溜衣のペースだったのか教えてもらいたい。

溜衣——いや、大抵の生物は楓に舌戦で敵うはずなど無いのだから当然なのだが。

そう、会話の雰囲気や空気は完全に彼女の手の平の上にあるようなものなのだ。

例え天下一品の弁論術を持っていたとしても、能力を使用した彼女を屈服できない。彼女の態度や雰囲気は変えられない。

『空気を操る程度の能力』

それが天狗の頂点に存在する天魔の——楓の能力。

この能力を使えば、相手から本当の事を聞き出す事も然別。

戦闘に関しては、見えないモノ。空気を操り、敵に気づかれぬ内に時に切り裂き、時に撃ち抜き、時に砕く。

天狗の頂点に存在する天魔。それに相応しい能力だ。

「まあそうね。瑠衣が言わなくても分かるもの。なんたって放棄可能な無茶な仕事も文ちゃんの為に偽装までしてやり切ろうとしたものね」

「そ、それは……。ぐう」

反論のしようが無かった。

「楓だって、わざわざあんな仕事を頼まなくっても良かったじゃないか」

「あら、私は瑠衣と文ちゃんの事を思って頼んだのよ。そこは両手を挙げて喜ぶ所じゃないカナ？」

「だけどあれくらの罪で階級が落とされるってんなら、大天狗のほとんどが役職を下ろされるんじゃないか？ その、あるんだろ？ お前だって後ろめたい事の一つや二つ」

楓の目尻がピクリと動く。それは凶星をつかれた肯定か。

「あゝあ、能力切るんじゃないかったわ」

楓は呆れたようにそう呟き、窓から差し込む光をうち仰ぐ。

「瑠衣が言っている事は間違っていないわ。今回の事が知られればそのうち幾人もの大天狗が山を追われることになるでしょう」

決まっている事なのだ。今回のような事例があった以上、たくさん
の所から、大天狗に対して審問が申請されることは。
私も忙しくなりそうね、と楓は呟き、そして続ける。

「だけどそれでお世代は変わる。寿命の長い妖怪だからこそ、そういう姑息な手段でしかこの天狗の社会は回らない。古いしきたりや考えじゃ駄目なのよ。遠い未来、私達天狗や他の妖怪のほとんどが人間達に忘れ去られてしまう気がするの。」

だからその時、場所や時間が変わっても順応できるよいな社会を作らなきゃいけない。だから、その時まで私はこの職を下りないつもりよ。能力を使っても非道だと言われても、私は天魔で社会が変わる経過を見ていたいよね」

楓は視線だけをこちらに向け、静かに微笑んだ。

「らしくない、カナ？」

何秒たっただろうか。彼女はこちらに振り返り問いかけるようにそう呟いてから、またその口に酒を流し込む。

「そんな事ないよ。どこかの誰かさんはいつもやると決めたら何をしてでもしちまう阿呆だからな。ま、出来る限りは助けてあげるさ」
「……………そう」

文が来るまで二人は静かに交わした酒を飲み続けるのだった。

一仕事後のそんな話。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

大幅に作風が変化する恐れがあります。一段落しばらくしたらです
けど。

それではまた(＾Ｏ＾)ノシ

出会い（前書き）

戦闘描写に多大な不安あり。独自設定があります。気を付けてください。

出会い

ゴオオーッ

ここは都からかなり離れた場所にある山の麓。季節が冬に変わりつつあり、山の向こう側からは冷たく乾燥した風が吹きおろす。そんな人影の少ないその場所の一角で、かなり大型の竜巻が発生していた。

「よし来いっ!!」

そこに少年の声が響く。どこか楽しげでどこか荒々しいその声は、竜巻のすぐ真下から聞こえていた。

その声の主は、竜巻に怯むどころか、足を前に出し竜巻に突っ込んでいく。

ゴオオーッ!!!!

その声の主が竜巻のちょうど目の前に着いた時、竜巻はその強大さを増す。

辺りに立った木は根ごと宙を舞い、竜巻の進むにつれ進行路にあった土はえぐれ、遠くへと飛ばされていく。

そして、それに抗うかのように辺りに圧力のような何かが放たれた。

「うりゃああああっ!!」

少年の咆哮。

それとともに、竜巻と圧力のような何かはぶつかり合う。
少年はその白い翼を羽ばたかせ、一気に加速する。

「ここだあああ!!」

そしてその拳に圧力のような何か——妖力を集中させて竜巻に向かって振るう。

ギインッ!!

金属が擦れるような鈍い音が響き、その衝撃波は周囲にある物を吹き飛ばしていく。

竜巻の強靱な風の刃。

少年の華奢な腕。

これだけを見る限りはどちらが強いかなど、見るに明らかであろう。

しかし、結果は違った。

「でりゃあああ!!」

竜巻と少年の力は拮抗し、やがて竜巻はだんだんとその強大さを失っていく。

そして、少年がもう一つの腕で殴りつけると同時に——霧散した。

「ふう……」

土がえぐれ、根ごと吹き飛んだ木が見回せば何本も確認える開放的な荒地。爆発でも起こったようにも見えるそこから数メートル離れた場所では、何事も無かったかのように自然そのものの姿を見せていた。

少年——瑠衣は小さく息をつき、何か考えるように頭をかく。

「見えなかったなあ」

「何がですか？」

独り言のように呟かれたその言葉に、空から問う少女の声があった。

少女——射命丸文は、翼で勢いを殺して瑠衣の少し前に着地した。着地したと同時にシャリツという霜が壊れた音^{しも}がする。

そう、霜である。

この天狗の山が四季の国——日本にある以上、冬になり一晚越せば土の下には霜が出来る。

たまたま先程の風圧や衝撃波に飛ばされなかった物が彼女によって、踏まれ、壊れたのである。

「文の下g——イテッ!？」

「何ですか？」

ちょっとした冗談のように告げたセクハラ発言も文の拳に阻まれる。

「さっき思い付いたんだけどさ、物が動く時って風が少しは吹くだ

ろ？」

「……まあ、はい。そうですね」

「おいっ！ 『また録でも無い事を……』 って言う目で見ないで！
？ 今回は真面目なんだってば！」

なにも、何の理由もなく文は瑠衣を疑っているのではない。

瑠衣本人が言っているように『今回は』であって、『前』に何回か文の思っている通り『録でも無い事』であった事も一度や二度では無いのである。

「そう言って、『録でも無い事』でなかった事がありましたか？」

「いや、無い……けど！ 話くらいは聞いてくれよ」

な、頼むよ。と頭を下げる上司に呆れた視線を送りながらも仕方ないといふ文は続けるように促す。

「コホン。……って事は妖力や霊力が動くにも風が生まれるだろう？ その風の動きに合わせて強力な妖力をぶつけて風の向きを変えればもしかしたら威力を上乗せして相手に反射出来るんじゃないかと思っただよ。さっきはその風の動きの手がかりくらい見えないかな、って思ってたさ」

はるか昔のように感じる前世の未来の漫画の事。

大妖怪と人間との子供の犬の半妖である主人公が妖怪になるために、時に仲間を守るために戦った物語。

その物語の中で、破○の矢やら風穴かざあなとか言うチート技がある中、唯一実現出来そうな技を瑠衣は見つけたのだ。

○の傷——その派生形である爆○破である。

風を口頃から使用する天狗には、その『風の動き』が見えるのでは？ と心ほとぼらせた瑠衣であったが、どうやらそれは見えず、失敗に終わったらしい。

そもそも、瑠衣は天狗ではないのだが……。

「……なるほど。そんな事考えた事はありませんでした。瑠衣さん、少し休んだら今度は私がやってみても良いでしょうか？」

「行くよ、文。準備出来たか？ 出来てたら手を挙げてくれ」

数百メートル先にいる彼女に届くよう、声を飛ばす。文はそれが聞こえたのか手を挙げた。

俺はそれを見るや否や、直ちに巨大な妖力の塊の作り始める。

体外に妖力を放出し、球体状にある程度固めてから軽く彼女に向けて投げつける。

中身がスカスカに近いこれを失敗して喰らっても、当たり所さえ悪くなければ怪我もしいと思う。

まあ、下手こいても当たりはしないだろうなあ。

当たり前の事を今更ながらに思いながら、集中しているのか、目を閉じ大きく息を吐いた文へと向かう妖力の塊を上空から見据える。

妖力の塊から文への距離はだいたい残り百メートル足らず――

五十――

二十――

十――

五、四――

三、二――

一……………。

零。

「なっ――！？」

彼女の漆黒の羽根が舞い散る。直後、その場に轟音が走った。

いりようか

まあ、医療科である。

無理に平仮名を導入する天狗の社会に、僅かに苦笑せざるをおえなかった。

それが刻まれた木の看板の脇を通り、扉をくぐる。

「すみません、瑠衣さん。重くないですか？」

「……重い（ピチューンッ）ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「まったく……」

呆れたような溜息が耳元で響く。

文は今、何故か俺におぶさっている。

本人が言うにはどうやらアレの衝撃で翼と足を怪我したらしい。

ちなみに俺は背中当たるナニカなんか知らにゃい。失礼。知らない。知るものか！

「つつ。なんでお前そんなに元気なんだよ!? 俺だって怪我人なんだから大丈夫なら下りてくれ」

「何を言いますか。私、全然元気じゃナイデスヨ?」

「片言じゃねえか! もう下ろすからな。自分で歩いてくれ」

廊下で騒ぐ瑠衣達であったが、幸い彼ら以外の天狗が見える事は無かった。

やれやれと吐き捨て、彼女の足を載せていた手を開放して、下りるように促した。

普通、おんぶされている者はこれをされた場合、重力に逆らう事なく地に落ちる。が、どうも数秒経っても彼女が足をつく音はしない。

「なんだ、ちゃんと飛べるじゃないか」

数秒おきに羽ばたかれる翼の起こす風が、木で出来た床に当たり、きしむ音が聞こえた。

「……さい」

「え?」

「抱っこしてください」

「は? さっきまでしてたじゃ——」「抱っこしてください」はいはい、分かりました」

両手を広げ背中をねだる彼女にやれやれといった表情で了承の言葉を告げる。

か、可愛い……?」

表向きでは平静に繕ってみせる瑠衣であったが、心の内では僅かに

動揺を浮かべていた。

僅かに目を逸らしながらこんな可愛げにねだられたら大抵な事なら許してしまいそうだ。

こ、この……男キラーがっ!!

心の内で声高くそう叫ぶ瑠衣。だが、表では

「まったく、お前は赤ん坊かよ」

不機嫌そうに彼女のまえで背中を向けて座り、乗るように促していたりする。

「だ、だれが赤ん坊ですか。私は大人です」

「へえ。おんぶされて喜んでもるのはどこの誰だかな」

「それでは聞きますが、おんぶして喜んでもるのはどこの誰でしょう
か」

「喜んでなんてないっ!!」

「誰とは言ってませんが」

「ぐぬぬ……」

「変態」

「（グサリ）変態……？ 俺が？ いや、待てよ。そうだ、男はみんな、変態じゃないかああああ!!」

要するに、彼は馬鹿だった。

閑話休題

あの瑠衣の叫びの後、叫び声を聞き慌てて出てきた医療班の天狗達に赤面をしながら、貰えるよう頼んだ葉草を瑠衣達は手にしながら、帰路へとついていた。

怪我の事もあってか、二人並んで道路——普段空を通路とする天狗には珍しい——を歩いていた。

「まったく、まさか開き直るとは。とても恥ずかしかったんですよ？」

「う、うるさい。お前は外見は可愛いんだ。誰だっておんぶなんてしたら嬉しいに決まってる」

「っ!?!...それにしてもいかがわしい事を考えていたような気がしましたが?」

「……もう良いだろ。終わった事なんだ」

「あ、逃げましたね!?!」

瑠衣が突然飛翔し、文がそれを追う。

「飛べたんじゃないか!」

「葉草塗ったら治りました!」

「ご都合主義過ぎるだろうがっ!」

天狗最速を冠する文にとって、離陸がたかが数秒遅れたからといって、なんら問題はない。

結果は見えていた。

ん、子供？ しめたっ！

瑠衣は急にその白い翼を翻し、飛行方向を変えた。

「お、おい。その少年天狗。どうしたんだ？」

「え？」

遠くからの瑠衣の叫びに少年天狗は首を傾けた。

「（頼む！ 何か用事があってくれ！ 迷っていたとか、そういうので良いから）」

瑠衣が少年にわざわざ声をかけた理由は、紛れもなく文からの質問から逃げる為であった。

瑠衣が他の用事があるのであったら文は無理にあのようなプライベートルートでしかない質問は出来ない。

少年を見た時、焦っていた瑠衣に偶然閃いた考えであった。

「えっと、あなたは？ 見たところ白狼天狗じゃないみたいですけど、一体どんな御用で？」

「いや、違うんだ。君が何か困っていたようだからな。困っていたのなら、力になるよ。言ってみてくれ」

優しそうに問い掛ける瑠衣。だが、少年はその視線がちよくちよく後ろを確認しているのを捉えていた。

用事などないと惚けて見るのも良いかもしれないが、やはり目の前に居るのは立場が上の存在だ。流石にそれはまずいだろう。

「実は医療科の施設に薬草を取りに来たのですが迷っちゃって……」
「そ、そうかそうか。よし、連れて行ってあげよう（良かった。助

かった)」

その時、突風が瑠衣の背中を撫でた。

「追いつきましたよ。よりによって子供を盾にするとは堕ちたものですね。って……おや？ 君はあの時の」

「あ、しんぶ……射命丸さん」

「あれ？ 知り合いなのか？」

瑠衣はもう一度少年を見据える。

まだ生まれて数年くらいしか経ってない白狼天狗。

「はい。この子は先日私が訪問した犬走警備隊長様の家の御子息ですよ」

ね？ と文が確認をとると、少年を頷く。

瑠衣はなるほど、と頷いた。

「君、名前は？」

「あ、はい。犬走くぬぎ柵と言います」

「柵、ねえ」

なんともまあ。木の名前が多いなあ。楓にしろ、あの大天狗の櫓にしろ、この柵にしろ。

「俺は瑠衣。遊撃隊の一応隊長をやらしてもらってる。先日は射命丸がお世話になったね」

「い、いえ。僕は御案内しただけですから」

ジト目で睨んでくる文をスルーするとして、問題はこの柵だ。

天狗は精神の発達によって体を老化していく。これは妖怪全てに言えることかもしれないが、いつもはつらつとしていれば若々しいままだけど、書類仕事なんか追われて家に閉じこもればどんどんと老いていく。
なのに、だ。

柵は謙遜やら敬語やらを使いこなす。つまりは精神はそれなりに成熟してきている。なのに、体は子供のままだ。身体が精神に追いついていない。俗に言う異常。イレギュラー
こういう奴の事を麒麟児とか神童って言うのかね？
それか――――。

「溜衣さん？」

「あ、いや少し柵が昔の友人に似ている気がするな」

「え？ 溜衣さん、御友人が妹紅さんしか居ないんじゃない？」

「うっさい」

文の疑問の声に俺は不満げに声を漏らす。

「妹紅？」

「ああ、人間だけど良い奴だよ」

「そ、そうなんですか」

驚いたように尋ねてきた柵は、その答えを聞いて狼狽しながら理解したと頷いた。

（それにしても……）

（おかしい。妹紅は天狗には……。それに……）

(こいつはアイツに)

(この人は彼に)

(似ている……………)

出会い（後書き）

一日遅れてしまった（汗
すいませんでした。

とまあそんなわけで変なフラグが立ちました。彼、結構出番がある
予定です。

後書きでオリキャラ紹介をする予定です。とりあえず4人ですかね。
一話ずつになると思います。

それが真実で仮説（前書き）

何を血迷ったかかなり文体を変えて書きました。

どうも今回の話はいつものようには書けなかったので。

ではどうぞ。

それが真実で仮説

「やれやれ、平和だねえ」

「……そういう事は休日と言って下さい。今は休憩といっても仕事
中なんですから」

「って言ったって、大天狗の件で表向きは無理に休暇取った事にな
ってるからしばらく休日は無いじゃないか。天魔にはその辺の事も
気にして貰いたかったのに——」

何をしてもし変わらない上司に文は小さくため息をついた。

変わったといえ、彼は最近時間を守って来てくれるようになった。
前にいつまでも来ないから家まで（字の如く）叩き起こしにいった
のが効いたのか。

まあ、事実彼の仕事への態度が好転している以上、原因を追求しな
くても良いだろう。

他に変わったといえ、文を名前で呼ぶようになった事だ。

彼女自身がお願いした事なのだが、たまにどうしてか恥ずかしくな
ってしまうのだから考え物である。

それと彼は最近、あの白狼天狗の——犬走の家に訪れる事が多く
なった。

最初こそそれに難色を示した犬走家の方達であったが、子供——
柵からお願ひされてしまい渋々それを黙認した。

『これが親の甘さという奴か』

などとその時文は思ったり思わなかったり。

まあ、それは置いておいて。彼が犬走家を訪れる事が多くなった。

と先程言ったがその頻度は7日に5〜6回と、かなり多いのである。
どうせ今日も仕事が終わったら遊びに行くのだろう。

これを知っているのは文や天魔様などの極一部の天狗だけではない。

文や犬走の家のある区域ではこれは専らの噂である。

大天狗の一件があつてか、最近文への態度が段々と軟化してきた天狗達の一人が文に尋ねてくるくらいに。

詳しく聞けば一部では禁断の恋では？　なんて声もある。

聞いた後、文は数秒間固まってしまったものだが、それは無いと思いたい。

そもそも柵は男なのだろうか。顔立ちは中性的であつたし、まだ子供だから声変わりはしていない。

例え柵の性別が女だったとしても、まだ子供だ。犯罪臭がプンプンする。

もちろん、余り年齢を気にしない妖怪である以上、その点は問題は無いのだが、どうも認めたくなかった。

結論

私は今日は溜衣さんについていこうと思います。

「溜衣さん、今日も柵くんのお家に？」

「ああ。それがどうかしたか？」

文の考えが分かるはずもなく、木を背にくつろいでいた溜衣は呑気な声で答えた。

本当に文の問いに疑問を持っているようで、彼女の顔を見ながら少し首を傾げる。

「今日は私もついて行っても良いでしょうか？　柵くんにも最近お会いしていないので」

「ああ。その方が柵も喜ぶよ。どうもあいつお前と妹紅に会いたい

って言うんだよなあ」

文はともかく妹紅は会うことはかなり難しいだろう。精神が成熟していると言ってもまだ柵は親から見たら三歳児程の子供。

前回のような“はじめてのおつかい”みたいな形で無い限り、彼が家に出ることは無いだろう。例え瑠衣や文が側に居てもそれは同じ。さらに言えば、妹紅は以前天狗達と敵対している。それを知れば黙っていないはずだ。

その逆——妹紅が犬走の家を訪れる事も同様不可能である。

彼等が会えるとすれば、ここ数年で人間と天狗の壁が無くなる事は論外として、柵がそれなりの訓練過程を経てから……という事になる。

少なくとも五年は要するはずだ。

「お前達の事狙ってたりして」

「まさか。柵くんはまだ四年しか生きてないのですよ？　いくら私達が可愛くても恋愛感情という事はありませんよ」

「うーん。そうかなあ」

こうして柵の好意の対象を考える様子は『まさしく愛だっ!!』という風ではなく、弟の恋人を探すような面白半分のようにであった。もうこの時点で文の誤解は解けたのだが、流石に今から『行かない』等と言うのは忍びない。

「そうですよ。さ、休憩も終わりです。さっさと仕事を片付けて柵くんのお家に向かいましょう」

「はい」

間延びした声で返事を返す瑠衣に、思わず小さくため息を漏らした後、文は青空へと飛翔した。

「今日は射命丸くんも一緒なんだね。夫婦円満で何よりだよ」

「だから、親父さん。文と俺はただの上司と部下。そんな関係じゃありませんよ」

「そうかい？ お似合いだと思ったのだが」

人が良さそうな穏和な笑みを浮かべて犬走家の大黒柱とも言える犬走警備隊長の最初の言葉に、文はこの場が玄関先であるにも関わらず、盛大に固まった。

そんな文を差し置いて、瑠衣は外から入ってくる寒気に身を震わせ、戸を閉めながら平然と答える。

普段なら文と同じ——いや、文よりひどい反応するであろう瑠衣がこの様子だという事はこのようなり取りがあったのが一度や二度では無いという事だろう。

しかし、そもそもこの人はこんな人だったのだろうか。少なくとも文が先日大天狗の件について聴きに訪ねた時は、もっと厳格な——

「文、あんまり気にしない方が身のためだぞ」

「は、はあ」

思考の最中、耳に入ってきた瑠衣の言葉に文は生返事を返してしま
う。

そして、その後慌ただしく足音が聞こえ始め、だんだんとその音が
大きくなっていく。

瑠衣と親父さん――櫛の父親はそれにクスリと笑みを零した。

そして、瑠衣が廊下の角に座り込み、タイミング良く掬い上げると
文が以前会った時に着ていたものに良く似た服を身に纏った櫛が、
ヒョイという効果音でも出そうな程に軽々しく瑠衣の腕に軽々しく
持ち上げられていた。

「瑠衣さん、いらっしやい！ 今日射命丸さんも一緒なんですか
！？」

「ああ。お邪魔するぞ。どうも射命丸がお前に会いたかったらしく
てな」

「本当ですか？ 嬉しいです！」

「は、はは……」

瑠衣に抱き上げられているため、文より高い位置からの子供らしい
純粹な笑顔に当てられ、文は思わず苦笑いをこぼした。

なんか違う……………。

会った時に比べるとかなり子供っぽいのだ。普通に考えたら、この
位の時はこれで良いのだろうが、文はどうも引っ掛かりをおぼえて
しまっていた。

そんな文に瑠衣は苦笑を一つ。口元に人差し指を持って行き『言う

な』というジェスチャーをして、柵を今度は肩の上に乗せた。

「それじゃあお父さん。僕達はいつもの部屋で遊ぶから入ってきちゃ駄目だよ」

「フン。子供の親離れがこうも早いとは思ってもいなかったぞ」

「いや、親父さん。それなんか違う」

「ん？　そうか？　なら良いが……」

それから柵のお父さんに一言言うと、柵を肩車した瑠衣はさっき柵が来た廊下の奥へと歩いていった。

「おい、文。置いてくぞ？」

「あ、はい！　今行きます」

後ろで柵の父親が「青春だね」なんて呟いたのなんて聞こえなかった見えなかった。

「あ、射命丸さん。先程の無礼は申し訳ありませんでした」

文が瑠衣達が入った部屋に入ると、既に柵は瑠衣の肩から下りていて、仰々しく文に向かって頭を下げていた。

それにまたしても文は固まってしまう。

クスクスと瑠衣の方から笑いが漏れた。

「こいつ、両親の前だと全然性格が違うんだよ」

「どうも両親がなかなか子供離れが抜けなくて。僕としてもああやってはしゃいでるのは好きなんですけど、どうも慣れないんですよね……。それになかなか言い出す機会も無くて」

アハハ、と頬をかきながら笑う柵は先日会った時と似た雰囲気を感じていた。

本当にこちらが根であるらしい。

「まあ、そんな訳で、どうにか親父さんにこの事を言う機会を作ったりはするんだけど、いつも土壇場で逃げ出しちまうんだよね」

瑠衣が微かに笑みを耐えて柵の方に顔を向けると、柵は恥ずかしげに俯きながら頬を膨らませた。

それは柵なりのちょっとした瑠衣への抗議だったりするのだが、瑠衣は気にしないようだ。

少し大人げないようだが、二人のやり取りはいつも対等で、下手に子供扱いすると柵はへそを曲げてしまう。と以前瑠衣が口にしたのを思いだし、文もその口を緩ませた。

「射命丸さんまで……」

「まあ、良いじゃないですか。私も子供相手の対応は苦手なのですよ」

「残念だったな、柵」

ケラケラと笑う瑠衣。

それを頬を膨らませながら、上目遣いで睨む柵を文は抱きしめたい

衝動を抑えながら、優しく微笑む。

「お、おい柵。今文の目が狩る者の目に！」

「ほ、本当ですか！？　そ、その、射命丸さん。そういう目をして
いると父さんが飛んで来ますよ」

「ま、待って下さい！　私はそんな目してません。少し微笑んだだけ
でなんで犯罪者扱いなんですか！？　って柵くん、後ろに下がっ
ていかないで下さい！」

「ま、まさか文がそっちの趣味だったなんて……」

「し、射命丸さん。そ、そういう事はいけないんですよ？」

ズイズイと文の立つ部屋の入口近くから離れていく二人に、文は言
葉も見つからないまま口を開閉する。
そんな混沌な空間にも勇者は現れる。

「柵、お菓子持ってきてあげたからちゃんと分けて食べるんだぞ」

天狗の山の警備隊長こと、柵の父親である。

柵の父親は部屋の中を見回し、ホッと息をつくと持ってきたお菓子
を文の足元に行き、華麗に右ターンすると――

ガッ

「ねえ。お父さん。あれ程部屋に来ちゃ駄目って言ったよね。おか
しいなあ。僕のお父さんはまだボケてないはずなんだけど」

「わ、悪かった柵。もう来ないから許してくれ。な？　一生の願
いだ。」

「まったく、何度目の一生のお願いだから分からないよ。許すのは
今回までだからね！」

「あ、ああ」

ぺこぺこと頭を下げる櫛の父親。親と子という立場が逆転しているようで、櫛の父親は櫛に頭が上がらないらしい。

瑠衣がここへ来るようになった理由として、先程櫛が両親を説得したと書いたが、もしかすると説得と書いて、ごうもと読むのかもしれない。

「あーあ、せっかく良いところだったのに」

「……………」

櫛と櫛の父親が出ていった後の部屋で瑠衣のそんな呟きが響いた。それは無意識のうちに放たれたのか、ピタリと苦笑が止まり、彼の視線がこちらに向いた途端、彼はガタガタと震えはじめた。

ちなみに、瑠衣の震えが止まるのは櫛が戻ってきてしばらく経ってからである。

「それにしても、お二人はいつも此処で何をしているのですか？
見たところ、この部屋には何もありませんけど」

「ああ、瑠衣は実は僕の父に頼まれて僕の警護を秘密裏にやってもらっているんですよ。この地域の大天狗様が追放されてから、そういう事は少なくなっただんですけど、それでも安全の為に。少し過保護すぎますよね」

笑いながら頬をかく櫛に、文はどこか既視感を覚えた。

自慢ではないが、子供の頃から文は普通の天狗より突出している部分が多々あった。周りから『天からの才を多く受けた者』、『天才』と呼ばれてもいた。

今、その文の前に居る櫛もまた、いま見ただけでも礼儀、性格、恐らく頭の回転も速さはずば抜けた者があった。そして、彼も『麒麟児』という文の『天才』とほぼ同義の代名詞として呼ばれていた。

恐らく、今の一瞬見えた既視感と同じような幼少期を送る櫛の中に、周りに持て囃されている時の自分が見えたのだと思う。

なるほど、と独りでに文は頷いた。

以前任されそうになった仕事内容だった文の両親の暗殺。あの惨状を繰り返さないように櫛の父親は、こうして自分の息子の周囲に警戒をおいているのだ。

なぜ自分の時もそう——文の両親に暗殺の事を伝えなかったのか。

文の櫛の父親に対しての思いはまさしくこれであった。

親玉が捕まっているあの事件の実行犯はまだ見つかっていない。なら、もしかしたらこの人が——証拠を教えてくれたこの人が自分の両親を殺したのでは？ そんな思いも無かったと言えは嘘になる。

だが、櫛の言葉を聞き。櫛の父親の本質を見て、文のその考えは無下に切り捨てられた。

もしかしたら、今から記すこれは間違いであるかもしれない。しかし、文の脳にはこの考えがよぎったのだ。

櫛の父親は、自分の両親に私に暗殺の手が迫っている事を伝えたのでは無いだろうか。

大天狗が殺すよう指示したのは文の両親では無かった。文本人であつたのだ。

今まで引っ掛かりを覚えていた『なぜ大天狗は文ではなく文の両親であつたのか』という疑問はそれで矛盾が解ける。

結果としては文の失墜に結び付いたものの、両親の死というのは、文本人の死と比べてしまえば目的に対して不適當である。

要するに、文を殺すはずだった何者かは、何かしらの異常によって両親の殺害という事で事態を終わらせたのだ。

そこでその異常というのが文の両親が文の暗殺について知り、対策を取っていた事。

そう考えてしまえばつじつまも通る。

そして、両親がそれを知る事となった理由が、助言者———櫛の父親の存在だったのだ。

よって文が殺されるはずだったシナリオは文の両親の死という、大天狗側としても、櫛の父親側としてもあらぬ方向に曲がってしまったのだ。

「射命丸さん？ どうしたんですか？ そんな難しい事を考えてるような顔をして」

気付けば櫛がその小さい体をさらに小さくして、文の顔を覗いていた。

その後ろで心配そうに文の様子を見る瑠衣の姿もある。

「いや、少しほうけてしまいました」

文は今までの考えをその笑顔の下に隠した。

何も知らない櫛のために、いち早く自分の考えに気づき、気にしているであろう瑠衣のために。

先程までの事は、いかに筋が通っていようと仮説。信じるには値しない。

それに、櫛の父親の言葉が結果的に文の両親の死に導いたのだとしても、櫛の父親に非は一切無いと言っても良いのだ。

ならば、その櫛の父親が守ろうとする者を、自分も守る立場にしよう。

そう、この時だけ文は考えた仮説を肯定した。

「お邪魔しました。それではまた」
「櫛、また来るからな」

「うん!!」

あれからしばらく、色々な談話をして今日はお開きとなった。
文は柵と共に玄関越しに居る柵の父親に頭を下げ、また幼児形態（笑）になった柵に苦笑する。

演技だと分かっているにも騙されそうな位の役者っぷりである。

「射命丸くんもまた来なさい。柵共々歓迎するよ」

「はい。お言葉に甘えてまたお邪魔しますね」

文が頷くと柵の父親は嬉しそうに微笑み、隣に居る柵の頭を撫でた。
突然のことに驚きながらも柵はすぐにまんざらでもなさそうにそれを受け入れた。

この人なら柵が隠している性格も分かっているんじゃないですかね。

文は何となく心の中でそう呟いた。

今回のことで知った柵の父親の性格からしたら、気づきながらも柵が自分から言ってくれるのを待っているのではないか。

その考えがピタリと当てはまっているような感覚がした。

「それでは、俺たちはこれで……」

適当な挨拶を済ませた時、突然の来訪者が現れた。

バサバサ、と慌ただしい羽音が溜衣と文の背後に響く。

「警備隊隊長、犬走銀杏様^{いちよう}。溜衣様もいらっしゃいましたか！ 天魔様が緊急の要件でお呼びです。直ちに天魔様の御部屋に向かってください！」

「待て。要件も言わずに急遽呼び出しとは彼女らしくない。なぜかは君も知っているのだろう？ 君が答えない限り私たちは向かわぬ」
瑠衣たちの後ろに舞い降りたのは一匹の男の鴉天狗であつた。
彼の慌てたような言葉に、違和感を覚えた櫛の父親——銀杏が、それに待ったをかける。

「それが、鬼がこの山に宣戦布告してきたと————」

困ったように言葉を濁した鴉天狗。

天狗にとっては重大で、それでいてこのような立場で聞くことになるとは。と瑠衣達に思わせる単語が確かにその言葉の中で異色を放っていた。

それが真実で仮説（後書き）

ってな訳でこんなになりました。

やっと一区切りのところまで来れたと、ちょっと感動気味です。
今回一日早いのはそんな理由です。

感想、誤字脱字の指摘を下さると嬉しいです。

次回は鬼の話。鬼と言えばもちろんあの人です。やっと新しい原作
キャラが……。

それではまた（＾Ｏ＾）ノシ

それが平穩（前書き）

いつもと変わらず土曜日週一投稿……。。

それが平穩

「それが、鬼が宣戦布告をしてきたと——」

一瞬、脳がその言葉を拒否したくないかのように、思考が停止した。

「それは天魔様が？」

「はい。混乱を避ける為このような場所で言うのは極限避けるように、と。おっしゃったので——」

男性の鴉天狗は、余程焦っているであろう。その額からは一つ雫が落ちていた。

「そうか……それは済まなかったな。私達もこれから支度をしてからすぐに向かおう。それで良いかね？ 瑠衣くん」

「はい」

「ではお二方、出来る限り早くいらして下さい。それでは私はこれで」

用を終えたと判断すると彼はすぐにその場を後にした。

楓もなるべく決断が決まる前に鬼の来襲を天狗達に伝えたくは無いらうし、この情報を伝達する天狗は少数。頭の堅い鴉天狗である彼が案内無しでこの場を去ったのも、これから多くの有力な権力を持つ天狗達の所へ赴くのだとしたら理解できる。

彼が去った後、親父さんは静かに目を見開いたまま固まっていた柵を連れて、家の中へ入っていった。

「まあ、聞いた通りだ。文、お前は柵に付いていてくれないか。今、

出かけている櫛の母親が戻って来るまでで良い。あいつを見張って
てくれないか？」

「見張る……のですか？」

俺は小さく頷く。

「あいつを野放しにすると、変に首を突っ込むような気がするんだ。
……前だって」

「前……？」

「いや、なんでもないよ。それで、頼まれてくれるか？」

「……分かりました。何かしら隠しているような気がします、そ
れは後日聞くことにしましょう」

「それは勘弁して欲しいな」

「ではここで聞きましょうか？」

「いや、後で良い」

どうやら俺だけでは文には言葉で敵わないらしい。

困った風に、俺は苦笑した。

「それじゃあ頼んだぞ」

「分かりました」

文が頷いたのを確認して、俺は仕舞っていた翼を大きく広げる。

「……争いになるのでしょうか？」

少し不安そうな文に思わず面食らってしまった。

彼女が自分の前でこのような表情をしたのは多分初めてだと思う。
俺は笑みをつくる。

「分からないさ、そんなこと。争いになったら、なった。ならなかったなら、ならなかったで、その時に考えれば良いんだよ。お前は指示を下す天狗じゃないだろう？　なら今変に気負う事は無いさ」

はて、これで彼女は満足してくれただろうか。

恐る恐る彼女の顔を眺めていると、驚いたような表情に変わっていた。

「驚きました」

「え？」

「まさかあの瑠衣さんがそこまで気の利いた事を言ってくれるなんて」

「なっ！？　たまにはこういう事だって言うんだよ」

「そうですか」

適当な返事を返す文に、言葉が詰まった。

そうですか、っておい。

「まあ、櫛の事は頼んだからな」

俺は会話が続かなくなった事を皮切りに太陽が沈んだ闇夜の空に飛翔した。

なんだってあんな返事を。いつもだったらからかってくる癖に……。

内心で一人愚痴り、瑠衣は今居る場所から、山に対して反対にある自分の家へと、その羽ばたきを力強くするのだった。

家で支度を終えた瑠衣は、ちょっとした正装に身を包んでいた。
今回集まるのは天狗の権力者達。下手に軽装で行き、何か言われでもしたら元も子もない。そのせいで胃の擦り切れるような思いをするのは御免だった。

「あ、おやしき……犬走警備隊長」

「ああ。やっと来たか」

特に打ち合わせておいた訳でも無かったのだが、楓の家の前には親父さんが立っていた。

親父さんは俺を確認すると、壁に委ねていた体重を足にのせて体制を直すと、こちらに近づいてきた。

「中にはもう多くの重臣達が集まってるぞ。私でも怖じけづくぐらいのな」

やれやれと肩を竦める親父さんであったが、今の俺には頼もしい限りであった。種族などの理由もあって、俺は天狗達——特に権力の高い大天狗達との相性は極めてよろしくない。親父さんが言う通り、この先にたくさん天狗の重臣達がいるのなら、入った途端、逃げ出したい衝動に駆られると思う。

「ありがとうございます」

「あん？　どうしたんだ急に。まあ、悪い気はしないから良いがな」

豪快に笑う親父さんの隣で微かに笑みを浮かべながら、俺は楓の家へと入っていった。

「……………」

「……………」

「……………」

誰も何も喋らない。要するに無音。

物音さえも響いてしまいそうな部屋の中、俺は先に座った親父さんの隣に恐る恐る座った。

カタッ

ギロッ

ビクッ

この三つの擬音表現で分かっていたただけだろうか。

用意されていた椅子を少し床に擦っただけでその場にいた天狗達全員
の視線に晒された。

思わず身を震わせた俺に、隣の親父さんからだけ同情の視線を送られて
きていた。

な、なんだってこんな静かなんだよ！？　もう少し騒然としていても
良いじゃないか。

所詮、現実逃避であった。

沈黙の中、胃の擦り切れていく感覚を感じながらだいたい15分程
経っただろうか。二人の天狗が席へとつき、席が埋まった。

すると、中央奥にいた天狗の一人が席を立ち、奥の部屋へと入って
いった。

恐らく、楓を呼びに行ったのだろう。

またも静まりかえった会議室。元々居心地の悪い部屋だったのに、
さらに居心地の悪い場所に変わったように感じたのは俺だけではな
いはずだ。

そんな即刻退出したくなるような部屋に、わざと鳴らしたような足
音が響いた。

俺の時と同じように、みながみなその音の方へと視線を向ける。

視線を向けられた音の主はその視線を軽く受け流し、凜然と歩いて
中央奥の真ん中にある空いていた席に座る。

続いて彼女を呼びにいった鴉天狗が座るのを確認してから、彼女――

――楓は口を開いた。

「急な呼びだしに集まっていただき、感謝します」

いつも俺と話す時の彼女。その面影は今こうして大勢の天狗の前で喋る彼女からは見る事は出来なかった。あの大天狗の一件でも見せなかったような、厳格な表情に俺は驚き、そして敬意をおぼえた。

そこで間を置き、椅子に座る面々を一通り見ると、彼女はまた口を開ける。

「この場に来る際に、遣いの者に聞いた者もいるようですが、この度皆を召集したのは、ある一件の事について知って戴く為です」

ガヤガヤとその場にいる天狗達が騒ぎはじめる。

ある者は高圧的な態度で隣为天狗を挑発し、ある者は後ろめたい事でもあるのか顔を俯かせた。

その中で平然としている連中は、親父さんのようにこれから告げられる事を聞いた天狗達であろうか。

その騒ぎも次の一言によって一貫としたまとまりを見せることになる。

「我々の山に大江山の鬼——酒吞童子等から宣戦布告がされました」

「「「……………」」」

高圧的であった者も、俯いていた者も、平然としていた者も、もちろん俺も。この場にいた全ての天狗達の視線が天魔に集まった。ほとんどの天狗は未だにそのことを理解していないように、口を開いたまま彼女に視線を送り続けていた。

もし彼女の脇に瑠衣が居たとしたら、こんな空気の中でもそんな光景に吹き出してしまうのは間違いない。

「それは本当の事でしょうか？ 天魔様がおっしゃる事は俄かに信じ難い」

話が進まない事に苛立ちを覚えたのか、先程平然としていた天狗の一人が席から立ち、意見した。
そしてようやく多くの天狗達の思考が再起動する。

楓は満足げに頷くと、一枚の和紙を取り出した。
その和紙に書かれた文字は遠い位置に居る俺でさえ確認できる程大きく、そして乱雑であった。

『お前達の山、いただきに行くよ』

それが書かれていた文字。あんな粗雑な文に、俺達がこんなに慌ただしく動かされていると思うと少々腹立たしい。

「この和紙は昼間警備に出ていた哨戒天狗の一人が、一匹の小さな鬼に殴り倒される前に押し付けられたものです。外見から判断しても『彼女』と見るのが妥当でしょう」

「小さな——なるほど」

それだけを呟くと、意見した天狗は理解したと頷き神妙な顔付きでまた、席に座る。

小さな鬼、か。そいつが大江山の鬼だという事が分かって事は酒呑童子の側近か何かか？

なにぶん、それを決定づける知識を持っていない。

いくら天狗達の話題に、その小さな鬼の事が上がっていようと、そもそも話をする天狗は限りなく少ないのだから。

だから、瑠衣はそれを確信するには至らなかった。

「期日も分からない以上、早めに対策や方針を決める必要があります。みょうにち明日の日が沈む酉の刻、またこの場で決定します。各自、自分の意を曲げる事ない意見を所望します。以上です」

「この件に関しては、無駄な混乱を無くすため、他言は一切無用でお願いします。此処に居ない者達には方針が決まり次第、伝える事を確約いたしますので、どうか御理解下さい」

楓が席に座ると、今度は彼女の隣に座った鴉天狗がそう言及した後、その場は解散となった。

「楓のところに行けば詳しい事を聞けるんだろうけど――――」

こんな事態だ。リーダーのあいつが暇な筈は無いよな。

楓の家を早々に出てきた俺は、とりあえず帰路へとついていた。

「やれやれ、こないだ大仕事をこなしたってのに、今度は戦争レベルの問題かー」

「まったくだ。まさか生きてる間にこんな事件に会うとはな……」

「はい……って親父さん、いつの間に隣に？」

「なんだ。もう少し驚くべきだと思うぞ？」

余りに自然過ぎて驚くに驚けなかったとは、敢えて言わないでおこう。

「それで、やっぱり今回の事は珍しいんですか？」

「ああ、言った通りだ。かれこれ天狗として何百年もこの山に住んできたが今回のような事は一度も無かったさ」

「そうですか……」

運が良いのか悪いのか。

間違いなく前者であろうが。

「ほれ、そう深刻な顔すんな。周りの者に気づかれちゃう」

「……そうですね」

「んー、変わらんんなあ。そうだ。今から家に来い。嫁には俺が説明するから、安心してくれ。その方が柵も喜ぶ。俺の手間も減るしな」

「結局は最後が本心なんじゃないですか……。分かりました。その御厚意に甘えてお邪魔させてもらいます」

居ないだろうけど、文が居たら聞きたい事もあるしね。

会議の前と変わらないような豪快に笑いを見せる親父さんの隣で、俺は呆れ半分、安心半分のため息をついた後、進路を変え、最近は何度もお世話になっている家に向かった。

「帰ったぞー」

戸を開けると、親父さんは家の――現代風に言うとりビングだろうか――の中を伺うように視線を送った。

「お帰りなさい――。あら、瑠衣君も一緒なの？」

「は、はい。お邪魔します。桜さん」

リビングの中から声がした。文とも楓とも違う、ややおっとりしたような声が聞こえた。

そして、美しい白い髪的女性が僅かに微笑しながらリビングの中から出てきた。

彼女は桜さん。犬走桜さん。柵の母で親父さん――銀杏さんの妻である。

声質に合った柔らかな笑みが、それを見た者を魅了させる。そのサラッとした髪が彼女の後ろ姿を見る者達を魅了させる。

桜なのに髪は白で良いのかよ!? とか変なこだわりを持った事もあったが、彼女の雰囲気は人を魅了する桜のようなソレであった。

少し誇張表現をした気もするが、俺の横にいる親父さんは、お世辞でも彼女と釣り合っているとは言えなかった。

「柵はどうしてるんだい？」

会議の事を彼女に端的に話した後、親父さんはそう切り出した。

それに桜さんは僅かに微笑し、喋っちゃ駄目よ。と言ってから俺達について来るように言った。

俺達は首を傾げ、彼女の後をついて行く。

進むにつれ、この家の事についてそこまで詳しくない俺でも行く先は分かった。

——柵の部屋だ。

そりゃ当然か。と俺は肩を竦めた。

彼が寝ているなら静かにしろ。と桜さんが言っていたのも柵が寝ているというなら理解できる。

桜さんはゆっくりと、出来るだけ音を立てずに戸を開けた。

「「スースー……」」

二つの寝息が聞こえる。それはこの部屋の神聖さを物語っているようであった。

クスリと桜さんは微笑して、こちらに振り返る。

親父さんと俺も、いつの間にか口元は緩んでいた。

鬼がどうだとか、悩んでいた自分が馬鹿みたいに思えてくる。

———そこには、小さな俺の友人が頼りになる部下の膝で。そして頼りになる部下もまた、静かに寝息を立てていた。

それが平穏（後書き）

少しオリキャラを増やしすぎた気がしないでもない。

まあ、なんとかかなると思いますけど、うまく使えていなかったら教えてくれると嬉しいです。

とりあえず萃香は特徴だけ登場。

とりあえず前々から言っていたキャラ紹介です。

瑠衣

種族 ライチヨウの妖怪???

本作の主人公。苗字は無し。この名前は母のライチヨウから頂いた唯一無二の——所謂、形見のようなもの。本人もかなり気に入っている。一応転生者。目が覚めたら……小鳥になってた元高校生。基本照れ屋で、あまり人に称賛されると顔を赤くして逃げる。自覚あり。改善はしようとはしてはいるが、結果はでない。仕事は好きではない。嫌いでもない。ただ意義を見出せないだけ。とか言うけど本心はややニート気味。好奇心旺盛で余程のことではない限り、関わろうとする。絡まれやすいのもあって大抵事件には関わる。それでいてかなりセンチメンタルなため、いちいちめんどくさい。それも改善しようとしてはいるものの結果は出ない。

能力 『電気現象を起こす程度の能力』

それではまた（＾Ｏ＾）ノシ

自分より他（前書き）

お久しぶりです。たぬくです。

更新がかなり遅れてしまって申し訳ありません。

今回、かなり？長いです。

それではどうぞノシ

自分より他

「桜さん！ これはどこに置けば良いんでしょうか？」

木で作られた食器で両手を塞いだ瑠衣の声が、居間に響く。その場には三人の人影があった。

「えっと、そこに置いて下さい」

「いや、代名詞だけじゃ全然分かりませんって」

「ほらこっちだ。その野菜は俺しか食わねえんだ」

「は、はい」

一人目は言わずと知れたライチョウの妖怪、瑠衣。

二人目と三人目は彼が昨日世話になった家の犬走 銀杏と犬走 桜であった。

「すみません。料理も手伝って頂いたのに配膳まで……」

「いえ。突然泊まらせていただいたのはこちらですので」

昨日は親父さんの薦めもあって、犬走家に宿泊することにしたのだ。他にも理由はあるが、それはまだ良いだろう。

「桜さん、そろそろ——」

「ええ。そうですね。それではお願いしますね」

「はい。では親父さん、失礼しますね」

「銀杏さん、私も——」

予め決まっていたように、俺はその足を、桜さんが後をついてくるのを確認してから、一つの部屋へと向けた。

「おい柵に文。朝だぞ。起きろ」

・・・・・・・・・・

その部屋の戸を開けて一声。しかし、二人の反応は無い。

「柵は頼みました。私は文さんを」

「分かりました。お願いします」

まったく、よくもまあ、こんなにも眠っていられるもんだな。子供は良く寝るって言っても昨日、布団に移す時にも起きなかったとなると。気楽で良いなあ。

呆れたように息を吐き出す。

「おい、起きろ」

柵の体を揺さぶる。起きない。揺さぶる。起きない。揺さぶる。起きない

「はあ。起こし方が悪いのか？」

いつそのこと、文が俺を起こしたみたいに跳び蹴りを入れて――
――いや、駄目だろう。何考えてんだろ。

「柵は叩き起こしてあげて下さい。その子、なかなか起きないんで

すよね……」

「あ……？」

叩き……起こす？

桜さんのイメージとは正反対の言葉だよな。まさか彼女がそんなことを言ったなんて……。うん。

柵。お前のお母さんはなかなかの曲者みたいだな。一家全員かもしれないけど。

まあ、とりあえず遠慮はいらないうのである。

俺は鼻と口を手で塞いで、起きるのを待つことにしようか。

「zzz……zzz……！　　~~~~~っ！！」

「ん？　あ、起きたか？」

「は、はい……って殺す気ですかっ！　朝起きて呼吸できなかったら間違いなく死亡ルート直行ですよっ！　学校に行くのも有り得ないから、道端で転校してきたクラスメイトとキャッなイベントも起きないんですよっ！」

「……？　　いや、悪かったって。余りにも嬉しそうに寝てるからつい、な」

後の方の言葉　華麗にスルー　完了

「完全に嫌がらせですよね！？　それ」

「柵。少し落ち着きなさいな。瑠衣さんも困ってますよ」

「は、はい。ごめんなさいお母さ……えん？」

荒く息を吐き出し、大きく息を吸う。

柵は石のように固まり、数秒してようやくこの場の状況に気づいた

らしい。

「お母さん、なんでここに？」

「私が居てはいけないのですか？ 文さんを溜衣さんに任せるのもまずいでしょう？」

「そ、そうなんですか」

まだ口調について気にしているのだろうか？ 桜さんは――親父さんもどうせ気づいてるだろうに。まあ、その辺に他人の俺が関わる訳にはいかないだろう。

にしても……。こんな中で良く寝てられるなあ、文のやつ。

ふと視線を向けてみると、桜さんの脇で嬉しそうな寝顔をして、寝息をたてていた。

まあ、俺が文を起こしたらぶん殴られるだろうし（起こすってのはまずいし）さっさと退散するとしようかね。

あまり物音を立てないように部屋を出ていく溜衣。

文が素っ頓狂な声を上げて起きるのは、それから数分後である。

「本当にすみませんでしたっ!!」

数分後。リビングで――頭を床に擦りつける文の姿があった。

だが、状況が理解できていない柵を除いてその場にいる全員は苦笑いをしていた。

「射命丸くん。君も最近のごたごたで疲れていたのだろう？ それを怒るほど私は懐が狭くはないよ」

「そうですよ。主人が家を空けてる間、柵と共に居て下さったのですから当然の事です」

「あ、ありがとうございます」

顔を上げ、文はホッと息をついた。

「さ、ご飯が冷めてしまいますよ。早く食べてしましましょう」

桜さんの一声で、全員が食べ物が載った食器が綺麗に配膳されている机に向けて歩みはじめた。

ようやく朝食にありつける。

ふとそんな事を思ってしまった。

久しく誰かと共に食卓で食べていないからか？

孤食に慣れてしまっているから、今回の食事が異質に見えてしまうのも、不便に感じてしまうのも頷ける。独りであったなら、誰かに合わせる事なく、自分のペースで食事を進める事が出来るのだから。

まあ、それはさておき

「文、後で聞きたい事があるんだけど――」

「瑠衣さんが起こしてくれればこんな事には……」

「え？　俺が起こしても良かったの？」

「……起こしてくれてたら拳一発あげましたのに……」

「ぜってえ起こすものかつ！！」

起こして俺にデメリットしかないじゃん！

「まあそれは良いです。それで、何か用でしょうか？」

「……ああ、さっきも言ったんだけど、後で時間良いかな？　聞きたい事があるんだ」

「へ？　……分かりました」

私用は程々に、席につく俺と文。

性別も踏まえてか、俺と親父さんと櫛が並んで座り、対面するように文と桜さんが机越しに座る。

目の前に置かれた食事の数々に、どれを最初に食べようか、と選別していると、ふと肩に手が置かれた。

「やっと先に進む気になったんだな。先人としての助言だが、直球が一番だぞ。無理に遠回しは相手の誤解をまねくからな」

「……？　？　？　は、はあ」

親父さんの言葉に曖昧に頷く。

「良い？　彼の言葉を聞いてから、一度ちゃんと考えてから答える

のよ？」

「え、えっと……？」

あちら側では桜さんが文に真剣な目で何かを伝えていた。親父さん達が言いたい事は臍げに分かる、がそれは決してない。うん。ないよ？

「父さん。そんなことより食べましょうよ。母さんも」

「ああそうだな。……櫛、お前反抗期か！？」

事欠かず、一向に朝食がとれない家庭であった。

「それにしても、親父さんは本当に親馬鹿だよなあ。」

「ええ。普段の仕事をする姿からは想像出来ませんよ」

「ん？ 文は親父さんと仕事姿を——仕事を一緒にした事あったのか？」

言い換えた意味は特にない。あえて言うならば、文が他人の仕事姿を目で追うような奴じゃないと断言出来るからだ。

「いえ。ありません。想像して言ってみました」

「……そか」現在俺達は犬走宅から謝礼そこそこに出てきて、今日

の仕事——と言っても山を飛び回っているだけだが——についていた。

文のあまり笑えない冗談はまだ彼女は頭が堅いからか。

まあ、最近は冗談を言ってくれるようになったただけマシになったのだが、もう少しはっちゃけてほしいものだ。

「そ、それより、お話とは何でしょう？」

「ん？ ああ……」

彼女も空気がおかしくなったのを感じたのか、申しわけなさそうに新たな話題を出してきた。

「こないだの件なんだけど——」

「こないだとは？ 柵くんと会った日の事でしょうか？」

「そ。あの俺が考えた技なんだけど、あの時——あの時お前は何を感じたんだ？」

この問いに対する彼女の答えは——

「あゝあ。結局は明確な答えは無しか……」

仕事も終わり、俺は帰宅していた。

独りの部屋に自分の呟きが響く。仕事も終わり、俺はたいしたことではない。が、それは何故か今の俺には不思議に思えた。

今まで違和感も無かった事に違和感を感じるなんて。デメリットと取るかメリットと取るか。

まったく、一日でこれなんだ。これが一週間も梶の家に泊まったというなら、俺は――――

まあ、そんな事は無いだろうけどね。

「……あ、この漬け物美味しい」

そんな事を考えながら、俺は犬走家を出る際に桜さんから戴いた胡瓜の漬け物を口に入れていく。

「……鬼、か」

ふとそんな言葉が口から出た。

そんな言葉、といっても今現在考えなくてはいけない最優先事項と言ってもいいだろう件についての言葉だ。

鬼――――

未来の日本でも一生聞かない者はいないその単語。

鬼に金棒

鬼の居ぬ間に洗濯

心を鬼にする

などなど、良く使うことわざにその名が入っている。この中でも鬼は、怖い、強いといった恐怖に準ずる意味が備わっている。それ程までに鬼は強く、恐ろしかったのだ。

その鬼の中の酒吞童子。

その名は日本三大悪妖怪にまでその名を連ねている。他の三大悪妖怪の一つが九尾の狐だと言え、その強大さが分かっていただけだと思う。

対して俺達側は天狗。こちらもよく知られていると言っても、鬼と比べれば霞んで見えてしまう。

現に下級の鬼一匹に烏天狗二人でようやく対等に張り合える位だと聞くのだから。

酒吞童子は言わずもがな、上位の鬼——宣戦布告に来た小さい鬼——だって倒す事は困難を極める、というより不可能に近い。

「やっぱり降伏ってのが最善なのかな」

もしかしたら皆それを考えているのかもしれない。

しかし、本当にそれで良いのだろうか——

「……寝るか」

答えは出た。下手に考えてもおかしな事になるだけだ。

「眠る前に、少し良いかしら？」

「……………?」

声だ。女性の声。

ここは俺の部屋。辺りを見回してもどこにも人影は無い。だが気にしてみれば視線を感じなくもない。

「失礼しますわ」

その言葉が聞こえたと同時に、俺の家の壁に裂け目が入った。

「あっ……!?!」

「初めまして。わたし「俺の家がああああああっ!?!」!?!?!」

「俺の家、俺の家があ……あんなに、あんなに一生懸命造ったのに。三日三晩っ、寝ずにつ、独りでっ、独りでっ……グッス」

自分で言っけて悲しくなってきた。

「えっ!?!? だ、大丈夫よ。ちゃんと隙間を閉じれば壁は治っていきますわ」

「ち、違うんです。独りでっ、家をつ、造った時の事っ、思い出しちゃって」

「えっ? そ、そうなの……そ、それは悪い事を聞いたわね」

閑話休題

「それで、どんな御用件だったのでしょうか？（キリッ）」

「も、もう大丈夫なのかしら？」

「はい。お蔭様で」

やっぱり閑話休題の力は偉大だと思うんだ。

「改めて自己紹介するわね。私は八雲 紫。スキマ妖怪ですわ」

「俺は溜衣。一応、ライチョウの妖怪だったのでまかり通ってます。よろしくお願いします、紫さん」

俺が自己紹介を終えると、八雲さんは妖^{まじ}しい微笑を一つすると、『紫で構いませんわ』と告げ、俺のベッドの脇に座った。

「用事としては私はあなたに聞きたい事があって参りましたの。そこで、質問を幾つかしてもよろしいかしら？」

「はあ。俺が答えられる限りでなら……」

そう俺が答えると、紫さんは視線を窓——その先に広がる夜空に目を向けて聞いてきた。

「それでは、あなたはこの世界をどう思っているのかしら？」

いきなり訳の分からない質問だ。

「質問の意味が理解しかねます。それは閉鎖した山の中に生きる俺に聞く事ではないでしょう」

「いいえ。あなたは楓から、私達妖怪が行き着く先の話を聞いた事

があるのでしょうか？ だからこそ聞きたいの。私達妖怪が消えていくこの世界をあなたはどう思うのかしら？」

「……っ!？」

楓の名がここで出てくるなんて……。彼女の名前を知っているって事は彼女とかなり親しい存在ととっても間違いでは無いはずだ。なら何故だ？ なぜこのタイミングでこんな話をしに来る？

「……答える前に一つ良いでしょうか？ 貴女は何故楓が言っていた話を知っているのですか？」

「私が知っているのは当然ですわ。あの話は元々、私が考えたのですもの」

「あの話は、貴女が？」

手に持っていた扇子で口を隠して、紫さんは小さく頷いた。

余計分からなくなった。なぜ紫さんは鬼の件で忙しい今、こうして話に来たのか。

「今度こそ答えていただけるかしら？ あなたはこの世界をどう思っているの？」

理解できない。だけど答えよう。答えてデメリットがある訳でもないんだ。

「俺は……俺は、嫌です。自分達が滅びると決まっている世界なんて。はつきり言ってそれじゃ今こうしてあなたと話していることも幻みたいじゃないですか。鬼が攻めてくるって騒いでいる事も。全部無駄なことみたいじゃないですか。そんなの嫌です。当たり前じゃないですか。」

「……それは楓の意思が入っていないあなたの意見かしら？」

「当然です。俺は——いや、誰だって自分の身は恋しいじゃないですか。自分が消えてなくなると分かっている世界なんて、誰だって嫌に決まっているでしょう？」

もちろん、皆が居なくなるなんて嫌だ。だけど、それを理由に出来るのは王道漫画に出てくる主人公だけだ。

『自分より他』その精神を否定する訳じゃない。むしろ羨ましく思う。

だけど、最初に自分が生き残れたとしたら、その後に自分が生き延びた方法で他人を助けられるじゃないか。それが一番多くの人が助かる方法だ。それが———決められたルールの上で争うしかなかった世界で生きた俺が見つけた只一つの方法なんだ。

「……合格、かしらね（ボソッ）」

「えっ？」

「いえ、なんでもないわ。一つ面白いことを教えてあげる。大江山の鬼。伊吹萃香はあなたたちの降伏は受け入れないわ。むしろ、降伏なんて申し出たら逆に暴れだすでしょう。それは恐らく遠くで聞き耳を立ててる天魔様もご存知のはずよ」

「っ!？」

楓が、今まで聞いていた!？ う、嘘だっ!!

「楓の能力も便利なものね。空気を通してどこからでも話が聞けるんですもの。私も戴きたいものね」

「あら、私はあなたの能力のほうが好きかな? 移動から始まり創造、破壊。なんでもござれじゃない?」

創造に破壊……? 厨二病万歳な能力じゃないか!

い、いや、そんなことよりこの声って楓の声だよな?

「私の能力もそこまで万能じゃないのよ？　だからお願いしてるんじゃない」

「それは何度も断わってるよね？　どうしてもそこまで月の技術が欲しいのよ？」

「月の技術があれば私の夢を実現する事が容易になるのよ？　やらない手は無いじゃない？」

「だから無理やりにでも頷かせるために伊吹をそそのかしたんでしょ？」

「さてどうかしら？」

「はあ……まったく迷惑なことをしてくれるわ。挙げ句の果てに瑠衣まで手伝わせようなんて……」

「あら、手伝うかは彼の勝手でしょう？」

「……………」

困った。話についていけない。

「それじゃあ、私は帰らせてもらいますわ。瑠衣君、期待してるわよ」

「は、はあ……」

俺の曖昧な答えを聞いて、紫さんは微笑を残して、来た時と同じ隙間の中に消えていった。

「楓、今の話って……？」

「安心して良いよ。瑠衣には関係ない事だからね。それじゃ、また明日会いましょう」

「お、おいっ!？」

それから何度読んでも楓の答えは無かった。能力を解除してしまっ

たのだろう。

あんなの聞いて、気にならないはず無いってのに……。

分からない。つながらない。そんな単語が頭を反芻する。そうして夜は更けていった。

自分より他（後書き）

疲れました。色々……。長文然り、修学旅行然り、テスト然り、マラソン大会然りで……。

次回はいつも通り週一投稿になる予定です。

それでは、また次回で。

友人（前書き）

大変遅れて、誠に申し訳ありません m () m

ずばり言ってしまうと、中々執筆が上手く出来ませんでした。
ネタも見つからない。

自分の考えている事にたどり着くまでが中々書けない。
修学旅行、マラソン大会、期末試験、模擬テストが立て続けにある
ってどういう事!?

等の事が原因です。はい。

一度番外編で息をついた方がいいのか、本編を無理矢理作り出すか。
どっちにすれば良いんでしょうね? ↑自分で考えろ

長々と失礼しました。

では、どうぞ（＾Ｏ＾）／

友人

「それではこれより会議を開始します」

先日と同じ、俺には居づらい空気の中、会議は始まった。

凜とした楓の声が響く。能力を使っているのでは？ などと思えるほど、その声は大きく耳に残る。

その言葉の一つ一つが、昨日あまり寝られなかったせいか重い瞼を開けていなくては……、という気持ちを増幅させるようであった。

楓は一同を見回し、また口を開いた。

「では早速本題に入りたいと思います。先日話した大江山の鬼『伊吹萃香』が我々、天狗に宣戦布告してきた件についてです」

楓が言い終わると彼女の隣に座っていた烏天狗が立ち上がった。まだ若いであろう彼は、そして続ける。

「では。降伏に賛成かどうか——」

そう口にした瞬間、俺は意識をその烏天狗から放たれる言葉から離す。

降伏……か。

質問の前提からして、皆の意見に対しての予想が結論になることを

予期しているようであった。

その場にいた多くの天狗達は、降伏に賛成の声を示し、それに含まれない天狗達は皆、どちらにも手を挙げなかった。

俺もまたその少数に含まれており、未だに結論が出せずにいる。というのが本音であった。

賛成に多くの手が挙がるのを確認した前にいる司会役の若い烏天狗は坦々と言葉を紡いでいく。

「賛成多数で、我々の対応は鬼側に対しての降伏という形に「待ちなさい」……？ 天魔様？」

「降伏に手を挙げなかった者もいるのです。時間もまだありますから、その方達の意見を聞いても良いでしょう？」

「は、はぁ。で、ですが……」

「命令です。私達の勝手で意見のある方を疎かにするというのはありません」

結論を述べようとした司会役の声を楓の声が遮った。

結論がまとまりホッと息をついた時だったのか、楓の話を聞く司会役の烏天狗の目は動揺に染まっていたのが、遠い位置からも把握出来た。

「……では、先程手を挙げなかった方は——？」

そう司会が口にした。すると、天狗達の視線はこちらに向く向く。

あれ？ 俺ってこんなに人気者だったっけ？

すいません。調子乗りました。忘れて下さい。

兎も角、天狗達の視線が俺に集まったため、当然司会の烏天狗の視

線も俺へ向く。

「えっと……瑠衣、遊撃隊長……殿？」

をい、名前も覚えてないのかよ？

なんですかあ？ 名前も知らないってのに毛嫌ってたのかよ！？

突っ込みもほどほどに、立ち上がる。

「……………」

「……………」

さて困った。『紫さんが酒吞童子は同盟なんて組もうとしたら、暴れだしますーって言ってました』

なんて言ってもただ笑い者にされるだけだ。

時間が経つにつれ、天狗達の視線がきつくなっていく。

「えっと、ですねえ。その……大江山の酒吞童子は降伏なんて受け入れる訳無いなんて思いませんか？」

「「「思いません」」」

即答であった。

楓が大きいため息をついたのが、見えてなくても分かる。

ごめんなさいです。はい。

「ちょっと良いかい？」

周囲からの視線に耐えられず、顔を俯かせていると、よく聞く声が耳に入る。

「どうぞ、犬走第十三警備隊長殿」

親父さんは司会の天狗が促すとほぼ同時に立ち上がり、口を開いた。

「私も降伏の件は賛同致しかねません。大江山の鬼『酒呑童子』は酒が好きだという事は名の通り。その裏で喧嘩が好きだと聞いた事があります。わざわざ都を挟んだ私達の山に仕掛けて来るというのですから、そういった何らかの目的があるのでしょう。彼女達の喧嘩私達が降伏した場合、その彼女達の目的が達成されない可能性が無いとは言いきれないはずです。ならば、これほど即座に降伏の意を決するのはいかなものかと存じます」

親父さんが言い終えると、会場が僅かに騒がしくなった。

纏まりかけていた決定に楔を入れるような形の意見だ。早々に結論を決めてしまいたい者や、降伏しか手段が無いと考えていた者が騒ぐのも頷ける。

「静かに。犬走第十三警備隊長。あなたの考えではどれくらいの目算かしら？」

そうして騒がしい会場に楓の声が一喝。即座に会場は静まり返る。

「……………二割くらいかと」

数秒の思考の後、親父さんはそう言い放った。

二割——だ。

先日会った紫さんの話を鵜呑みにする訳では無いが、楓がその事を否定しなかった事も含めると、俺の中では降伏は頭から消えていた。しかし、それらの事を知らない親父さんが目算した確率は二割。これでも盛った方だと思う。

噂で『酒吞童子』が喧嘩好きだと広まっていたても、この山を攻めてくる理由としては些か心許ないのだ。

「二割……………」

楓は考えるように呟き、

「それでは皆の意見とするのは難しそうですね」

そう告げた。その言葉の断片には彼女のこの意見になるようにという願いが垣間見ることができるのだが、それに気づいたのは数少ないだろう。

「と言っても、犬走第13警備隊長の話も有り得ないとは言いきれません。皆、念頭に入れておくように」

楓の言葉を皮切りに、司会の天狗が結論が『降伏』であった事を簡

単に告げ、会議はお開きとなった。

「親父さん、先程はありがとうございました。助かりましたよ」

「まあ、良いってもんよ。始めて会議に出たんだろう？　なら上出来さ」

親父さんと並んで廊下を歩く。周囲の視線も些か気になるが、何か対処するほどではない。

「そうですかね？　それなら……よかったですかね？」

「いんや。だけどお前さん、自分の言いたい事も言えなかったろう？　それはいかんぞ？」

「まったくよ。せっかく機会をあげたのに無駄にしちゃって……」
「ですよね………？？？！　かえ……じゃなくて天魔様！？」

自然に俺と親父さんの会話に入ってきた声。

聞こえてきた方を見ても誰もいない。

しかし、その声には聞き覚えがあった。

またしても能力を使用しているのだろう。楓の声だった。

「天魔様とはいえ、他人の話を盗み聞きするのはいかなものかと」

「それについては謝罪いたします。瑠衣に話があって話し掛ける時を見計らっていたのですが、つい……ですネ」

親父さんの糾弾するような言葉に対しての声の様子からして、面白そうだったから首を突っ込んでみたようにしか聞こえないんだが。

「それで、御用とはなんでしょうか？」

用があるなら早く言って欲しい。こちらでは通り掛かる天狗が皆こ

ぞってこちらを見ている（睨んでいる）のだから、とつとこの場を離れたいのだ。

「はい。今から話があります。私の部屋まで来てください」

「はあ。しかし」

俺は周りを見回す。

「この場では出来ない話なのでしょうか？」

「ええ。それでは待っていますね」

またろくな事じゃないんだろなあ。

ため息を一つ。ホント最近ため息が凄く多い気がする。疲れてんのかなあ？

「親父さん——」

「さっさと行ってきな」

「はい」

親父さんに一声かけてから、俺は楓の部屋へと続く廊下を歩いていた。

「瑠衣です。お申しつけ通り参上しました」
「入りなさい」

ノックを二つして、いつもと同じような応答をしてから部屋の戸をくぐる。

部屋には誰もいなかった。楓以外。

あんな会議の直後だ。話にきた天狗の一人や二人、又は司会役の天狗が居ると思っていたのだが、それは杞憂だったらしい。

「どうしたんだ？ 急に呼び付けて……？」

突然敬語が無くなった瑠衣の言葉に、楓は僅かに微笑して、答えた。

「さっきの会議の話は覚えているよね？」

「ああ。寝てたりなんかは……出来ないしね」

会議中寝てたりなんかしたら、明日にはこの山に俺の姿は無いと思う。

いろいろ言い掛かりつけられて、山を追い出されるだろうから。

「まあそうね……それで瑠衣にお願いしたい事があるんだ」

「……降伏の申請を鬼に伝える役……だった？」

「あら、大正解っ！」

「嬉しくない。ってかそんなの却下」

「うううう」（泣）

まったく、こいつは……

「承諾しても良いけど——」

「えーっと？ 瑠衣は涙目に弱い——」

「やっぱり止めとく」

「そ、そんな……」

打ちひしがれたような表情で、膝をつく楓。

演技です。決して気にはいけません。

そう。だからさっきまで見ていた凜とした雰囲気と正反対の彼女のギャップで凄く可愛く見えるとかそんな事はなくって

「ま、まあ楓がそこまで言うんなら別に承諾してやらないことは無いけど」

だから、別に理性が負けたとかそんなんじゃないんだからな。うん、決して。

「……………」

「な、なんだよ！？」

ちょっとした沈黙に気まづくなり、尋ねてみると

「明日は槍でも降るのかしら？」

これである。

凄く泣きたくなったです。はい。

「楓なんか大嫌いだあああ！！」

という理由は二割ぐらい。恥ずかしさが大半で、全力で駆け出す。

後ろで何か言ってるけど何も聞こえない！

扉を開けて部屋から出ようとした時、

「ウグッ」

前から（・・・）の衝撃に俺は意識を落とした。

「突然走ってきたんで怖くなって叩いたんですけど……どうかされ
たんですか？」

足元で昏倒した上司と、それを追っていたらしく僅かに息を切らした
首長を前に射命丸文は首を傾げる。

「あ、アハハ。ちょっと、ね。あつたのよ」

対して楓の答えは酷く曖昧なものであった。

文にとってその『ちょっと』の中身を聞きたかったりするのだが、
楓は立場の関係もある上、能力もある為、どうせはぐらかされてしま
うだろう。

なので、深くは尋ねない。

「それで、何の用カナ？ 文ちゃんと呼んだ覚えは無いのだけど？」
「ムッ」

なにか引ッ掛かりを覚える言い方であったが、楓には言葉を選んで
いる余裕なんて無かった。

彼女は文の足元で沈んでいる『友人』へと何度も視線を動かす。

「瑠衣さんに頼まれて犬走第13警備隊長の家を訪れたのですが、
どうも柵くんが見当たらないらしくて……。こちらに迷子の届けが
出てませんか？」

本当の事を言えば、瑠衣さんからはそのようなことは頼まれてなん
かない。ただどうしてか体が犬走家に向かってしまった。

もしかしたらそれだけ、あの『暖かい』場所が私にとって大きなモ
ノに変わってしまったのかもしれない。

しかし、居なかった。

居たのは、柵がいなくなり近所の天狗達に見かけていないか、と尋
ねて何も手がかりも無いまま落胆して帰ってきた桜さんだけだった。
泣き出してしまった桜さんを宥めていると、会議が終わったらしい
銀杏さんが帰ってきた。

そして銀杏さんと談義した結果、そのような事を何か知っていそう
な瑠衣さんの元にこうして来たのだ。が――――

文の口調は敬語の割にどこか針があるようなものであった。
顔は笑っているようで笑っていない。

「文ちゃん？ 別に私は瑠衣を仕事があるから呼んだだけで」
「届いてませんかね？」

どうでもいい。そんな事。

どうでもいいはずだ。瑠衣さんと天魔様がどのような関係だって。ただ私は少し気になっていただけで――――

「え、ええ。届いてないわ」

「そうですか。失礼しました」

ただ私は上司と部下というだけの関係なんですから。

らしくない楓に背中を向け、早々に部屋から退出した。

後々、あの部屋に行った理由るいを置いてきている事に気づいたが、それまでで文は天魔の部屋に戻ろうとはしなかった。

この時したのが勘違いだと気づき、文が楓に頭を下げるのはまた後話である。

「銀杏さんに何と言えば良いでしょうか……」

奇しくも、自分の身勝手で目標を達成できなかった事を悔やむ文であった。

「うん……」

なんかどうも俺はこんな役回りが多い気がする。
寝ちまったり、気絶したり……。
まあそんな立ち回りをしてるからなんだろうけどさ。

まだ痛む前頭部を右手で抑えながら、上半身を起こし――――

ツツ！？

頭に何かが当たった。

「「ツツウウ……」」

手を抑えていた右とは逆、左側からの衝撃に閉じていた目を開く。

「いきなり起き上がらないでよ……もう」

開いた目に光が差し込み、段々と視界がみえてくる。すると、その
視界の左端には頭を抑えて呻く楓の姿があった。

えっと、状況を把握しようか。

上半身を起こしたら、頭に何かが当たり、目を開けたら頭を抑えて
呻く楓がいた。

うん。状況把握に時間はかからなかった。

「あー、えっと悪い……。立てるか？」

「ええ。……大丈夫よ」

ややヨロヨロとしながら立ち上がる楓。

悪意があった訳では無いといえ、流石に罪悪感が拭えない。

そんな不安げな俺の視線が気になったのか、楓はすぐに顔をそらしてしまった。

俺はどうする事も出来ずに、静かに立ち上がる。

「「あ、あのさ……」」

二人して顔を見合わせる。

「楓、先良いぞ？」

「う、うん。その、溜衣？ あのね？」

「お、おう……」

会議の時とも、普段とも、演技している時とも違うような、そんな楓の雰囲気思わず俺は恥ずかしくなってしまった。

自然となんか胸も高鳴ってくる。

これが楓の演技だったとしたら、俺は後で馬鹿にされるだろう。いや、馬鹿にされるに違いない。

でも、今回だけは演技でも良いと思ってしまった俺は負けだろうか？

「えっと、ね。さっきはごめんなさいっ！　その、出来ればずっと友達でいて欲しいです！」
「へ？」

その日、俺は初めて彼女が人一倍……いや、人一倍友人関係で不器用な俺より、遥かに不器用だということを知った。

友人（後書き）

前書きの他、特に書くことが見つからないです。

改めて、投稿が遅れてすいませんでした。

以下、キャラ紹介

楓（天魔）

種族 烏天狗

瑠衣の数少ない友人の一人であり、天狗の山に彼を誘った張本人。天狗達の頂点———天魔として働く彼女は多忙である。しかし、ちよくちよく瑠衣や文と会ったり、山を抜け出したりと、仕事をサボったりもする。

見聞は能力の為か、広く浅い。今のところ、明確な友人は瑠衣と紫だけであったりする。

今回の話に書いた通り、人付き合いに関しては本当は不器用。

いつもは能力を使用して仮面を被っているのか、とりあえずは天狗達との不和は無いらしい。

能力 『空気を操る程度の能力』

訂正。謝罪。

第12部での主人公説明の際、能力が

『電気現象を操る程度の能力』

になっていたものを

『電気現象を起こす程度の能力』

に訂正しました。

第二話で書いていたのに不一致をおこしていました。大変すいませんでした。

地海月様、感想での会話の不一致はこちらの責任でした。誠に申し訳ありませんでした。

風向きは変わる（前書き）

少し早めに投稿できました！

風向きは変わる

「出来ればずっと友達でいて欲しいです！」

そんな楓の一生懸命に告げた言葉に、俺は素っ頓狂な声をあげてしまった。

あの俺や文に愛想を振り撒く彼女こそが、彼女の演技でもない本当の彼女の姿なのだと今までずっと思っていた。けど、それは彼女のほんの一部か、はたまた演技だったか。

本当の彼女の姿は——他人より遥かに不器用で、とても淋しがり屋な、友達思いの少女だったのかもしれない。

いつもの楓が演技をしていたとしても、あれも彼女の一面なのだとしても、長年一緒に騒いでいたせいか、何となく、なのだけど今、こうして不器用ながらも頭を下げるそんな彼女が演技ではない。と、そんな気がした。

「だ、駄目……だよね？」

そんな思考の際に出来た沈黙を、否定と受け取ったのか楓は僅かに鼻にかかる様な声でそう呟いた。

「はあ……」

「っ！　　る、瑠衣？」

小さなため息にすら動じる目の前に居る幼いような彼女に、俺は思わず笑い出しそうになる。

彼女は本気なのだというのだから、かなり不謹慎だと思うけど、あまり気にしてもいない事を、それこそ一生懸命に謝られて、苦笑し

てしまいそうになるのは仕様がない事だと思うんだ。

「あのさ、楓。俺はさっきの事なんざ気にして無いぞ？」

「ふえ？ ……で、でも嫌いだって——」

「確かに言っただけどあれは、冗談の範疇だよ」

むしろ、ちょっとしたギャグのつもりだったんだ。

はつきり言ってこんな展開になるとは万が一にも思っていなかった。

クスリ、と笑みが漏れる。頑張って耐えていたのだが、もう限界だ。

「フフツ。まさか、楓が、ククツ」

「~~~~っ!?!? / /」

「んで、どうなの？ お前ってそっちが本当の——」

「瑠衣の馬鹿あっ!! (バチィーン)」

確かにからかい過ぎた気もする。けど、全力でビンタすることも無いだろうに。

数十メートル離れた壁に激突するビンタって何!?

妖怪こじつちじゃ普通なのかもしれないけどさ。

まあ、それはさておき。

「そういえば、外交の使者云々の話だけど……」

「……ああ。それね」

楓はまたからかわれるかと警戒していたのだろうか？ 一瞬、目を細めてこちらを見て、問題ないと判断したのか口を開いた。

「さっきも言ったけど、別にやっても良いぞ？ もし鬼達が交渉に応じなかったら逃げ帰るけどな」

「ホント？ それはありがたいな。候補としては瑠衣しか居なかったからね」

別に逃げ帰るのには文句は無いらしい。

敵陣に孤立してしまった時、逃亡（戦略的撤退）するのも賢明な判断だと思うから。だそうだ。

いや、そんなことより。

そんなことより、だ。

「なんで口調戻したんだよ……」

「べ、別に私の勝手じゃないカナ？」

「あっちの方が男にモテるだろうに……」

「モテル？」

「いや、あっちの方が雄の天狗が求婚してくる数が増えるんじゃないかな
いかとね……」

「はあ？ 良いのよ、別に。皆権力が狙いなんだから」

前にそんな経験でもあったのか。イライラとした口調で呟く。

その求婚してきた雄を気に入ってたのか、はたまた権力目当てで求婚してくる奴に嫌気がさしただけなのか……。

まあ、多分この様子だから後者だと思うけど…… (笑)

そもそも、楓が恋する乙女だったとか想像できな—— (ガッ)

「何か変な事考えてないカナ？」

「い、いや、考えてないから……な？」

「……一段落付いたら寝起きに襲撃でもしようかしら？ (ボソツ)」

なんだか死亡フラグが立った気がする。

話は戻って。

「それで、どんな事を言えば良いんだ？」

そう口にして、手を差し出す。

やはり、台本が無いと辛い気がするんだよね。

「？ 自分で考えなさい」

「あ？ ほ、本気で言ってるの！？ このゆとり教育を受けてきた俺に台本無しで外交の大事な舞台に立ってって!？」

「???? ゆとり教育？ 瑠衣に頼んだ仕事やっぱり少な過ぎたって事カナ？」

「ち、違います！ こっちの話です!!」

仕事がこれ以上増えたら死ぬる自信がある。

そもそも威張って言える事じゃ無いなあ。

ゆとり世代がうんたらかんたら。っていう番組で余りにも自分に共通する部分があったから、どうもそれが当然だと、少し思ってたのかもしれない。

まったく何を思ってたんだか……w

自分が情けないよ。うん。会社だったら一発で首になってもおかしくない発言だぜ？

「ま、まあとにかく。自分で何言うかは考えてみるよ。あと、仕事は増やさんと良いからな」

「そうなの？ 分かったわ。……後で増やしておいてあげるネ（ボソッ）」

「聞こえてるからな？」

その後、俺の仕事を増やす増やさないでギャーギャー騒ぎ、どうにか辛勝を勝ち取った俺は、一言挨拶をしてから部屋を出ようと、楓に背を向ける。

「あ、そう言えば瑠衣が寝てる（気絶してる）間に文ちゃんが来たわよ」

「文が？ ……そういえば気絶する前にあいつの良く履いてる下駄を見たような……」

「あら、そんなことも知ってるのね？」

「ん、まあ上司だからな」

ちょっとしたからかいを平然と返された楓は苦笑する。

しかし、上司だからといって部下の良く履く靴を知っているのはどうなのだろうか？

少し危ない気がするのはいた仕方のない事のはずだ。

一度、彼にとっての上司と部下という立場の関係の定義を話し合った方がいいと思う。

「それで？ 居ないところを見ると、すぐに用事が終わったんだろう？」

「えっと、終わったというか……私には何も出来なかったから文ちゃんはまだ続けてるんじゃないかな？」

「ふーん。ちなみに何の用だったんだ？」

「うーん。まあ瑠衣にも関係してそうだから話しても良いかな。なんか柵ちゃん（……）が居なくなっちゃったらしいのよね」

聞いた瞬間、心臓が跳ね上がるような気がした。

居なくなった？ 柵が？ どうして？

……もしかして

数秒間の思考。

考え出されたのは一つの可能性だった。

しかし、普通に考えてみればその可能性は限りなく零に近い。

だけでもし、柵があいつだったなら……有り得る。

だが、柵があいつだったとしたら、あの馬鹿だったとしたら、その

可能性は極端に跳ね上がる。

なんせ、前科持ちだ。怪しいか怪しくないか、と聞かれれば怪しいと答えざるおえない。

「あんの馬鹿……ッ」

思わず歯を噛み締める。妖怪になってから、異様に伸びた犬歯が擦れ合い、悲鳴をあげるかのようにギリギリと音を鳴らす。

俺は止めていた足を即座に動かし、楓に指示を飛ばす。

「楓もあの馬鹿を探してくれないか？　なんか嫌な予感がするんだ。この山には居ないと考えて良い。この山から東の方角。都の方を中心に探してくれ」

そう告げて、即座に部屋を出て駆け出す。

答えも聞かずに飛び出した事に関しては、後で謝ろう。だけど、無理矢理にでも頼みたかった。

もし、これが俺の勘違いだったとしたら、そんな時は良いお酒の一本でも都で買っていけば文句は言われないはずだ。

全速力で駆けて天魔の屋敷を飛び出す。中では飛んではいけないという約束が、今回は甚だ邪魔なモノに感じた。

上空はまだ青い。夕暮れまであと二刻程か。日が沈む前にどうにか探し出さないと。

一方、瑠衣が出ていった天魔の部屋では椅子に座り、窓から見える青空を眺める楓の姿があった。

「ええ。今、瑠衣が向かって居るわ。貴方も東へ向かって頂戴。桜さんにはとりあえず山の中をもう一度探すようにと。ええ。お礼は瑠衣と文ちゃんに言っておいて。私は通信の媒介を果たしているだけだから。……それじゃ頼んだわよ」

誰も居ない部屋に楓の声が響く。別に彼女が『エア友達』と話していた訳でもなく、その独り言のような言葉の理由は、彼女の『能力』を考えれば分かることだ。

「銀杏君には伝えたから、後は文ちゃんね。すぐに見つかるの良いけどね」

今度こそは独り言。

ちよっとした呟きだったのだろう。その独り言は続く。

「都の東————大江山の鬼は今いったい何をしてるのかな？ 酒でも飲んでたら一矢報いたい気分だわ」

彼女は閉じていた窓を開き、スッと手を出した。

「風が変わってきた……。これは吉兆か、はたまた凶兆か。どちらにしても事が起きてしまうのは変わりないカナ。ねえ、貴女はどう思うの？ 紫」

独白であつたはずの言葉。その言葉に、隙間の中に居た女性は静かに笑みを零した。

「はあ。時間が惜しいってのに検問なんか……」

適当に応答しながら、ボソリとそう呟く。

目の前では、まだ若い天狗が忙しく紙に何か書き留めていた。

そういえば、彼女はこの検問をどうやって突破したのだろうか？

検問する天狗は、ほとんどが『千里先をくくく』という能力を持ち、山に入る際はもちろん、山を出るにも彼等に感知されない事は出来ない。と昔、楓が自慢げに語っていた事を思い出す。

やっぱり、勘違いなのか？ そうであって欲しいけど……。

子供の天狗は山からは出られない。何時だったか、そう告げたのは

必ず山を出る前に検問の天狗達に見つかり、追い返されるからであつたりする。

限りなく低い可能性は更に激減する。しかし、胸の不安は拭えなかつた。

これが俗に言う嫌な予感という奴なのだろうか？　今までほとんどのほほんと生きていた俺にとってそれは生まれて初めての感覚であつた。

「天魔様直属の遊撃隊の溜衣様ですね。どうぞ、お通り下さい」

日頃から都に遊びに行く機会が多かつた俺はよくこの検問を通る事が多い。その為、顔見知りも多く、細かい手続き――筆跡の照合等はなく、他の天狗と比べれば簡単に外に出ることが出来た。まさか、遊びで都に通っていたのがこんなところで役に立つとは、驚きである。

「良いですねえ。今日も遊びに行くんですか？」

「いんや。ちょっと仕事まがいな用事があつてね」

そんな少し皮肉がかった検問の天狗に、俺は焦る気持ちを抑え、嫌な顔せず答える。

親父さんを始めとした白狼天狗は、烏天狗程頭が堅い訳ではない。白狼天狗の中でも、若い連中は年寄り連中が目を光らせている時で無ければ、天狗ではない俺にも気楽に声をかけてくる者が多い。だからといって、親しくなりすぎれば彼等の将来を狂わせかねないので、『友人』といった関係にはならず、浅い交友関係がベストだつたりする。

「そうそう。悪いけどこのくらいの白狼天狗の子供は見なかったか？」

自分の腰くらいの身長だと手で示しながら尋ねる。

「子供ですか？　いくら俺でも子供は通しませんよ。えっと、今日出てったのは今のところ射命丸さんだけみたいですよ？」

「文が……？」

てっきりまだ山の中を探していると思っていたのだけど……。もしかしたら、文は櫛が外に居るといふ証拠を知っているのかもしれない。

となると、やはりあの馬鹿は山の外に……？

この嫌な予感も、存外信用できるのかもね……。

「良いですね。射命丸さんみたいな女性ひとが部下だし、休暇は多いし。俺も推薦してくれませんかね？」

「あー。天魔様には一応言っとくよ。言っただけだけだな」

まあ彼も冗談だと分かっているのだろう。ケラケラ笑いながら間の伸びたお願いをして、自分が配置された所へと去っていった。

彼の後ろ姿を見送る間も持たずに俺は木漏れ日が降り注ぐ木の間を抜け、空を駆けた。

———没ネタ———

これは、瑠衣がビンタで壁にぶち当たったすぐあとの話。

「良いっ!? 忘れなさいっ!」

楓は壁の下で呻く瑠衣に駆け寄り、彼の両肩を掴んで持ち上げた。

「か、顔近っ!? ……い、いや、衝撃あり過ぎたから忘れようとしても無理だからな?」

「こ、こうなったら執事流記憶消去術で———」

「いや、お前執事じゃないだろうが」

「そんなの、御都合主義でなんとかなるわ」

「いや、御都合主義っておい———」

「でりゃあああっ!」

「ちょっ、待っ!? 絶対記憶消えなっ———」

風向きは変わる（後書き）

没ネタはあれだ。気にしないで欲しい。一期前のアニメのネタが出てくるのはなんでなのかな。↑知らん。

お読みいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1498w/>

東方雷鳥録

2011年12月3日18時53分発行